
宇宙檸檬

木下 汰我

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙檸檬

【Zコード】

Z4580T

【作者名】

木下 汰我

【あらすじ】

雑貨屋『宇宙檸檬』の主人、黒髪の青年 紀伊呂 くえんは最弱をもつとうに幻想郷の住人として生きていた。タバコを吸い、酒を飲む。そんな日常を過ごしていた。

いつもの日常

幻想郷、人間と魑魅魍魎が共に生きる場所。天狗や河童が支配する山、妖精達が舞い踊る湖、瘴気に満ちた森、そんな信じられない世界だ。そんな世界で人間が普通に生きていける訳がない。現に人里と呼ばれる集落に肩を寄せ合って生きているのが現実だ。その人里にも妖怪の類は現れるのだが、ありがたい事に人里では人間への手出しは禁止らしい。人里では、つまり人里の外、特に夜なんかに外出して妖怪に食われても知らないって事だ。それでも有難い。それなりに人間と魑魅魍魎は友好的にすごせている。こちらが変なちょつかいを出さなければ、日中なら人里から出てもそうそう食い殺される事はない。このルールや世界を作ったという妖怪賢者様には一度会つてお礼を言いたい限りである、その人のお陰で仕事も出来ているわけだし。

「なんだかんだで俺も慣れたな。この地にも」

店先でタバコを吸いながら、妖怪、人間が行き来する路上を瘴気に眺めている。

当店、雑貨屋『宇宙檸檬』です。まだ開店一年のこの町では新米の店です。俺自身もこの町に住んで一年弱の新米だが、周りの商店や客とはそれなり友好的な関係を築けている。俺『紀伊呂くえん』は一年前に神隠しにあつた。それまで中国地方の一都市で暮らしていた普通のフリーターだった。毎日のようにバイト先に行き肉臭くなるまでステーキを焼き、たまにホールに出て他のバイトに仕事を任せてホールを歩く、店が閉まつたら社員と一緒に発注をする。そんな生活をしていた。そんな俺は神隠しにあい、この幻想郷に流れ着いたのだ。

幻想郷の説明の補足になるが、この地は俺たちがいた世界とは隔離させているらしい。博麗大結界とかいうので明治頃に。慧音先生が詳しく述べてくれたが、歴史なんか興味がない元理系男子の俺はすっかり忘れてしまっている。重要なのは明治頃に隔離されたということだ。文明が不便なままなのは我慢できる、しかし嗜好品が偏っているのが我慢できなかつた。服に関しては着物を中心であるが、洋服のあり困りはしなかつた。しかしキセルはあるがタバコがない酒は日本酒、焼酎ばかり。ベースモーカでビール党の俺には辛い世界だ。だから俺はこの店を始めた。自分の欲しい物を手に入れる為に。慧音先生の紹介で妖怪賢者の式と知り合いになり必要な物を入荷し売る。儲けの6割は渡さないとならないが、発注さえミスしなければ赤字にはならない。それに酒は売れる。この地の娯楽の中心が酒なのはありがたかった。他の酒屋と喧嘩にならないように日本酒や焼酎は売らずにビールや洋酒を売つていい。他の商品のそんな感じに周りの輪を乱さないよう気に使つていい。お陰で商店とはいはいい関係だ。

「紀伊呂、入荷の物を持ってきたぞ」

店先に中国の術師が着ていそうな服の女性が立つていた。一見だけで彼女が人間ではないとわかる。なんたつて9本もの狐の尻尾が生えているのだから。

「藍さんありがとう。別に直接持つてこなくてもよかつたのに。重たいし」

彼女は八雲 藍、噂の妖怪賢者の式だ。式とは何か彼女本人から聞いた事があるが、正直理解してない。俺の生活には利用出来そうになかったから。

「かまわないさ。ちよつと人里に買出しもあつた事だしな」

そう言いながら入荷品のリスト渡された。

「なら買出しついでに酢檸檬酒なんかどうだい？　なかなかさっぱりして美味しいよ」

「入荷した記憶はないから、君の自家製か？」

「つうの商品として最近売り始めたもの。自家製だけど、なかなかの出来だよ。売り上げも、客の評判のいいし。あと檸檬酒も。こつちはストレートで飲むもんじゃないけど、サイダーで割れば美味しいから、いっつもビッグだい？」

ついでにつひの商品を進めてみる。うちの店に合わせて柑橘系のお酒にも手を出し始めている。これも酒屋のおっちゃんと仲良くなつたお陰で作ることが出来た。本当に有難いかぎりだ。

「わづだな。両方いただこうか。紫様も喜ばれるだろ？」

まこじ、そういうながら酒を2本包み藍にお金と交換で渡す。そして俺は店先に詰めたダンボール3つを店内に入れ始めた。藍も買出しをする為に離れようとしていた。そして俺は聞きたいことがあるのが思い出した。

「そうだ藍さん。博麗の巫女が変わったって話だけどまだ幼いらしいけど大丈夫なのかい？」

「ああ靈夢の事か。大丈夫だろ？ 幼いが才能は有るからな。それ

に大きな異変も最近は起きてない。にしてもどうした。君がそんな話を聞くなんて

「先代の巫女にはこっちに来たときにお世話になつたし、少し氣になるのか」

大丈夫ならいと答え藍を見送つた。

博麗神社。幻想郷唯一の神社でありそこの巫女は幻想郷のバルンサーを担つてゐる。外から來た俺からしたらそれくらいしか知らないが、あそこにはそれなりにお世話になつた。幻想郷に流れ着いたばかりの時、先代の巫女や慧音先生の仲介で人里で暮らすことができ、こうやって店を持つことが出来た。先代は最近病で死なれたらしく特にお礼も出来ないままになつてしまつた。今は弟子の子が巫女をやつてゐるみたいだが少し気になつてゐる、先代の恩をまだ返せてない俺からしたら。でも大丈夫なら特に気にしなくてもいいのかもしない。

その後いつも通りに営業を行い、日が沈みしばらくして店を閉め、2階の住居スペースでつまみの川魚と酒だけという質素な晩飯を食べてゐる。外にいた時も似たような食生活だったが、あの時はパスタかジャンクフードだった。焼き魚なんて年に数回しか食べる事無かつた。そう考へると変わるものだ。昔だと魚に塩をふつただけのものがつまみにはならなかつただろう。今はこの質素な味が幸せだ。

「またそんな夕食なのか、くえん」

入り口に1人の女性が立つてゐる。水色の髪をした美しい女性。たまにこうやって人の家に勝手に入つてくるのだ。美しい女性だから特別に許している。

「慧音先生、男の一人暮らしなんてそんなものですよ。食事なんて優先順位が低いんです」

上白沢 慧音、俺の恩人と呼べる人の一人だ。よそ者の俺に対しても親切してくれた。外の、ここでは外来人と呼ばれるが俺みたいに生きて人里にたどり着ける外来人はそうそういない。たいていは妖怪の胃の中に辿りつく事になる。そのせいもあり町はよそ者に冷たい傾向にある。妖怪対しては冷たくないのにおかしな話だ。そんな俺の手助けをしてくれたのが彼女だ。今もこうして俺の様子を見に来てくれる。

「なら結婚でもしたらどうだ？　お前もいい年なんだから」

「いい年つたつて22ですよ。二二じや18での結婚も珍しくないですけど、外じゃまだまだ独身を楽しむ歳です」

「そんなものか。まあ今日はそんな事を言いにきたのではなくて、付き合つてくれないか？」

そう言いながら彼女は持っていた酒瓶をあげて俺に見せた。

「日本酒ですか、苦手なんでこれでよければ付き合いますよ」

俺は近くにあつたビール瓶をあげて彼女に見せた。毎度のやり取りをし、彼女はつまみを2、3品新たに作る為に台所に向かった。

思えば女性と飲むなんて外にいた時からあつたが、相手が美人、しかも半妖だなんてこんな事なかなか経験できることではないだろう。なんでも彼女はハクトクとの半妖らしい。彼女がどういう種族の半

妖で、どういう経緯で今にいたつたかは特に興味がないから詳しい話は聞いてはいない。しかし半分妖怪の彼女が人里で暮らし、寺小屋で教師をやり、里の守護者と呼ばれているのだ。この世界の妖怪と人間の関係を表しているような人だ。

しばらくして慧音先生が出来たつまみを持つてこちらに来た。

「そういえば妹紅はどうしたんですか？ いつもなら一緒に飲みに来るのに」

「ああ、妹紅ならいつものやつだ

「いつも、ね。それにしても飽きませんね。もう何百年も続けるんでしょう？ 彼女にとっちゃ数少ない生きがいのはわかりますけど。」

「まあな。しかし本人の問題だから私たちがとやかく言つことではないだろ？」

「もつたいないけどな。妹紅も美人なんだし結婚でもすればいいのに」

「それこそ無理な話だろう。彼女には……」

人と人外の区別

店の定休日を利用して俺は霧の湖と呼ばれる場所まで足を伸ばした。いい釣りのスポットとして有名だが別に釣りをしにきたわけではない、ただの散歩だ。それに俺の友人と呼べるやつもここにいる。

「おーいバカチルー。どこにいる？」

そいつの、俺が勝手につけたあだ名を言いながら湖の周りを歩き回る。しかし一向に出てくる気配がない。いつもなら、バカじやないもんとかいいながら現れるのだが。

「くれん、あの妖精ならいないぞ」

背後から呼び止められ、振り向いてみたら銀髪の少女、妹紅が釣竿片手に立っていた。

「よつ、なんだ飯でも捕まえに来たのか？」

そんなとこ、と彼女は答え俺を追い抜き歩き始めた。目的の相手がいなくて暇になつた俺は彼女の後を追いかけることにした。しばらくすると、釣り場なのだろう、そこについた彼女は湖に竿を向け釣りを始めた。ここまで会話はゼロ。無視ではないだろう。彼女の性格からするに極力人との関わりをとらないための会話をしないという行動だ。

「妹紅、酷くないか？無視とか」

その性格を理解した上で彼女をからかってみる。

「無視じゃない。別に話す事がないだけだ」

「まーいいけど。にしてもチルノのやつどうしたんだ? 大概は湖で遊んでるだろ」

「緑の髪の妖精つれて竹林にいたぞ」

緑の髪の妖精ならいつもチルノと一緒にいる彼女だろう。いつも暇で遊び好きの妖精の事だ、竹林まで遊びの足を伸ばしてもおかしくはない。あそこに暇つぶしになるものなんてないとおもうが。妹紅なら暇つぶしになる連中を知っているだろうが、教えるとは思えない。しばらくしたら筈でも持つて戻ってくるだろう。

「チルノいないうら湖まで足を伸ばす意味無かつたな」

「お前やけにあの妖精に執着してん」

「まつ友達だからな。けしてロリコンではないぜ」

妹紅は俺の言つたロリコンという単語が理解出来なくて首を傾げている。ロリコンなんて概念この地にはないだろうな。昔の日本なんてロリコンやホモだらけだったし。光源氏なんかカリスマロリコンだし。

「お前変わってるよな、妖精なんか友達つて呼んで。外のやつは皆そうなのか?」

「さあね。ただ面白いやつだから友達なだけ。それに妖精も妖怪も関係ないだけ」

それが変わってるんだろ、と妹紅はため息をついた。たしかに変わっているのかかもしれない。妖怪は人を襲う、妖怪は人を惑わす。そんな相手を友達と呼ぶなんて。たしかに幻想郷の理念に沿った考えだろうが、実際はそうもいかないだろう。ただ俺が適用性があつて、妖怪や妖精の恐ろしい面を見てないからだけだから、気安く妖怪を友達と呼べるのかもしれない。

「まあ、変わってるかもね。でも人間なんてものの境なんて曖昧だからね。外にや見た目人間でも中身や考えていることが化物のやつなんてざらにいたし。目の前にも人間って呼んでいいのかわからんやつがいるし」

俺の言葉に妹紅は苦虫を噛み締めていた。彼女も思うところがあるのだろう。慧音曰く藤原 妹紅は不老不死らしい。老いることも死ぬことの無い身体を持つた彼女ははたして人間と呼んでいいのだろうか。少なくとも外の世界なら人間あつかいはされないだろう。モルモットか化物の二択しかない。だが幻想郷という優しい世界でなら人間か化物かのを選択を許されている。だからこそ彼女は辛いのだろう。人外と決めつけられたら諦めもつくものだ。しかしここでは自分で選ばないといけな。優しい世界というのは時にして残酷なかもしれない。

「だから俺は区別が出来ないのさ。区別が出来ないから、面白いやつは友達って呼ぶことにしてるだけ」

本当はそれだけではない。チルノを友達と呼ぶのは罪滅ぼしでしかないのかもしれない。もう出来なくなってしまったことをやるために。

妹紅はそう、と呴いただけで釣りを続けている。彼女も思う所があるのだろう。死はない、老いない彼女は人間に恐れられ、かといって妖怪にもなれない。そんな中途半端だから。

「まあ帰るかな。妹紅、今度魚持つて家に来いよ。昨日、慧音先生と飲んだんだけど、寺小屋の教育つてつまらん話だったから上手く酔えなくてね」

「そりや災難だつたな。気が向いたらつまみ持つていぐよ」

俺は妹紅と別れを告げ、人里に足を向けた。俺が人間がどうだなど考え、妹紅の悩みの手助けをしようなんて偽善なかもしれない。俺がこれからいくら素晴らしいことをしても、それは偽善で罪滅ぼしでしかない。俺は逃げたのだ、この世界に。だから博麗の巫女が俺を外に帰そうとした時に、俺はここに残れるように懇願したのだ。そんな俺が妹紅に現実と向き合わせようなんて傲慢すぎる。

俺は人間だ。しかし中身はただの化物だ。この世界なら最弱でいられる、俺のなかの化物が誰も傷つけることはない。そういう意味でも幻想郷は俺にとっては理想郷だ。

半刻ほど歩き人里に着いた。門番のにいちゃんと軽く挨拶をして門をくぐる。チルノと適当に遊んで今日はすごやうと考えていたが、チルノがいない今予定なんて皆無だ。慧音には自衛の為に暇な時にも使って、靈力の使い方の練習をしろと言われているがやる気にはなれない。そんな事をしたら最弱でいられなくなってしまう。里の皆少なくともお札を使えるのに俺だけ使えないという構図が壊れてしまつたらここに逃げた意味がないのだ。

しかたないので近くの甘味屋で団子を買って家に帰つて来た。お茶

を入れて団子を口に運ぶ。自然な甘さだ。外だつたらもつとしつこい甘さだろう。こういうものを吃べるとこの良さを実感できる。一気に残りの団子を口に運びお茶を飲む。そしてタバコ吸いながら寝転がる。幸せだ、こんな生活が。こんな俺が味わうべきではない幸せだ。

始まりの雨

今日も今日とて店番だ。だが外は午後から生憎の雨模様、どうせ今日は客は来ないだろうと思いながらの店番だ。娯楽品中心の店だから雨の日にはいつきに暇になってしまふのは考え方だ。里には竜神様の石像がある。その像の目の色でその日の天気がわかる。そのせいで雨が降るとわかっている田は最低限の仕事だけして家で過ごす習慣がある。便利なものが、客が来ないのは困りものだ。

そういうえば竜神様の石像は山の河童が作つたものらしい。約70%の確立で天気を当てるなんてどんなしくみだろうか。しかも像を整備している様子も見たことが無い、それ以前に河童なんか見たことがない。天狗ならたまに見かけることがあるのだが。人見知りが激しい種族とも聞いたことがあるが実際はどうなんだろうか。慧音が言うには青色の髪をしてすごい機械操るらしい。機会があれば会つてみたい。70%で天気が当てるのだ、さぞすごい科学力があるのだろう。俺の生活水準を上げるために、店の商品を増やすためにも。

ぼーと見ていた店の外に人影が見えた。どうもうちの店に向かってきているみたいだ。そいつは青色の髪をしていたが、俺が会いたがつている河童ではない。むしろ科学なんか無縁なただのバカだ。

「おーい、くえん来たぞ」

「特に呼んでないけどな。つか商品濡らすな。今タオル持つてくるから待つてろ」

先日会うことが出来なかつたチルノだ。自称最強の少し頭が可愛い

事になつてゐる氷の妖精。自他ともに認める最弱の俺とは考え方が
間逆に位置するが俺の友人と呼べる存在。

「ほらタオル。にしても珍しいなお前が人里にくるなんて。金なん
か持つてないだろ?」

タオルを渡してやると髪やら身体を拭き始めた。チルノが動くたび
に回りに冷氣が散つて気温が下がつていく。

「ああ、金がなくても来る妖精もいるな。この泥の三人組が」

「あたいは最強なんだから、こそ泥なんてせこいことしないし」

こそ泥がせこいならせこくない方法は強盗か、と聞きたかったが聞
いたら本当にしそうだ、主に俺の店で。

「そんなことより、すげえことがおきたぞ!」

妖精が言つすごい事なんてあんまり期待は出来ない。基本的に頭が
平和な妖精だ、人食い蛙が出たとかそんなところだろう。いや、そ
とだつたら十分すごいことだ。むしろ世紀の大発見だ。

「湖の島にでけえ家があらわれたんだ。しかも真っ赤な!」

これなら幻想郷でも人食い蛙のほうがすげえ事だ。真っ赤な家なん
て大して面白みがない。ましてや廃墟に住む騒靈の三姉妹がコンサ
ートする世界だ、またおかしな廃墟が増えたつて面白みなんてない。

「くえん探検にいこつよ」

言うと思つた正直行きたくない。確かに雨で客は来なくて暇ではあるが、いちいちそんな所には行きたくない。第一に安全かどうかわからない場所に好き好んで行くわけがない。

「いやだ。そんな所行くか」

「なんだビビつてるのか？ 大丈夫、なんたつて最強のあたいが一緒なんだからな」

「じゃ最弱の俺と合わせて普通だから却下だ。そんなに行きたいなら大ちゃんといけばいいだろ？」

「なんか大ちゃんも行きたくないとか言つてるの

大ちゃんとは大妖精と呼ばれる緑色の髪の少女だ。妖精は自然の具現といえる存在だ。その彼女が行きたくないというのは本当に危険な場所なのかもしれない。彼女なら自然の変化から危険を察知してもおかしくはない。一方チルノは妖精にしては強い力を持っている。仮説だがそのせいで妖精から外れ妖怪に近い位置にいるのかもしれない。そのせいで自然の変化に対して鈍感になつていても考えれる。だとしたら性格からしても一人でもその家にいくだろう。1人で行つて怪我でもしたら後味が悪い。なら一緒にいつてやるべきなのかもしれない。最悪の場合は俺の最弱を理由にして逃げればいいだろう。

「しゃあない、行つてやるか。客もこないだろ？ でも俺が危険だと感じたらすぐ帰るぞ。俺はお前と違つて最弱なんだから」

店を閉めて、チルノの案内で話の家が見える場所まで着いた訳だが、まず家ではない。屋敷とか豪邸と呼ぶべきだ。そして真っ赤と聞い

ていたが思つた以上に悪趣味だつた。昔の貴族が住んでいそうな大きな洋館で時計台まである立派な作りだ。本来なら綺麗と呼べる作りが赤色のせいで全て台無しだ。赤じやない箇所がない時計台の文字盤まで赤色だ。少し喉にこみ上げてくるものがあるが唾液で無理やり押し戻した。

正直もう帰りたい。思つたより雨が強くてブーツは泥だらけになつてしまつたし。それよりも周りに誰もいないのが異常だ。妖精はまだわかる。怖くて棲み家に隠れてしまつてているのだろう。それでも天狗までいなのはおかしい。天狗という種族は噂好きで新聞まで発行しているのだ。だからこんなおかしなものが現れたら出てくるはずだ。普段なら本当にくだらない内容でも記事にしているのに。正直俺は天狗に遭遇するのに期待していた、たぶん俺の知り合いの新聞記者もここにいる。彼女の新聞の数少ない購読者の俺に話しかけてくると期待していた。しかし一向にその気配はない。

数日前藍が言つた言葉が頭を過ぎる。異変、もしかしたらこれは彼女が言つていた異変なのかもしれない。だとしたら大丈夫なのだろうか、ここ数年大きな異変は起きていないらしい。なんでも妖怪が弱体化し始めて大きな異変を起こす力をなくしてしまつたらしい。おそらくこの建物は俺がいた外の世界から来たものだろう。妖怪たちは外から来た異変に対抗出来るのだろうか。そして異変の解決を専門にする博麗の巫女はまだ幼く、代替わりしたばかりという。彼女はこの異変に対抗出来るのだろうか。俺の頭の中で出てきた答えはNOだ。妖怪も巫女もこの異変に対抗出来ないそう答えがでてしまった。

この世界が変わる。そのことに俺は恐怖を覚えた。外来人の俺は危なくなつたら逃げればいいのかもしれない。しかし俺には帰る場所などないのだ。俺は外から逃げてこの理想郷に逃げ込んできた。こ

こ以外にもう帰る場所はない。恐怖でしかない、この理想郷が壊れてしまつことが。

「くえんどうしたんだ？ 急に黙り込んで」

チルノの声で俺は現実に引き戻された。あれこれ考えても始まらないだろう。今はこの悪趣味な洋館が危険なもののかを調べるのが優先だらう。かと言つて俺が何が出来るのか。子供でも発動出来るお札さえ使うことができない俺が出来ることがあるのだろうか。武器といえる物は護身用の無駄にごついナイフ一本、あとはチルノ頼みの状況、これは相当気合を入れて挑むべきなのかもしれない。

俺たちは思ったよりも簡単に屋敷の中に入り込むことが出来た。内装も赤一色である。ちょっとした調度品さえも赤色だ。それは誰かの血をばら撒いたかのように俺の目に映りこむ。こみ上げてくる吐き気を押さえながら慎重に足を進めていく。入る前はチルノが静かに侵入なんかが出来るか心配だったが、流石は悪戯好きの妖怪だ。忍び込むという行為も楽にこなしている。よく神社に忍び込んで遊んでるというのは伊達ではないようだ。そして空が飛べるのは便利だと再実感してしまう。飛んでいれば足音の心配なんてしなくてもいいのだから。こんなことなら飛ぶ練習だけでもすればよかつた。もつともお札を使うのと違つて空を飛ぶ行為は一部の才能がある人間しか出来ない行為だ。俺みたいな最弱ができるとも思えないが。

「それにしても誰もいないわね。ちつとも面白くないじゃないの」

「俺は有難いけどね。お陰で侵入もできたんだから」

「でも、せっかくの冒険なのに面白みがないし、少し暴れてやれば誰か出でぐるかな？」

そんな事をされたら出てきたやつと、ちょっと命がけな鬼ごっこに発展してしまう。それにしてもこのままだと侵入した意味がないのは確かだ。ここに人、もしくは妖怪が住んでるのは確かだろう。あきらかに手入れが行き渡っている。

「どうするかな。なあ最強のチルノさんはどうが怪しこ」と思つ?」

「もちろん上に決まってるわ。こんなでかい家に住むやつは上方

で踏ん反りかえつてゐるはずだわ」

なんともチルノらしい単純な考えだ。バカと煙は高いどこが好き、それ对付加えるなら権力者も高いとこ好きなものだ。あきらかに漫画やゲームのイメージでしかないのだが。

「じゃあ上を目指して進みますか」

チルノの返事を背後に上に向けて足を進めていく。それにしても壁や床、天井まで赤いと感覚が狂つてしまふ。それに色があからさまに血の赤だ。ここのはよっぽど血が好きなのだろう。それなりイカ好きの変人ではないことは確かだろ。あいつらの血は青色だし。考へるのは気が狂つた人間か、妖怪。血が好きな妖怪なんて俺の浅知恵では吸血鬼ぐらいしか思いつかない。思えばこの屋敷にはあまりにも窓が少ない。吸血鬼といえば日光の下では行動が出来ないのが有名だ。そう考へると適当に考へている仮説が当たつてしまいそうで怖い。キリシタンではない俺はもちろん、チルノも十字架なんか持つてないだろ。

「なあ、なあてば」

「なんだよ。こつちは考え方で忙しいんだよ」

「あの部屋から声しないか?」

チルノが指差す先には大きな扉があつた。さしづめ広間でもあるのだろう。チルノに手で付いてくるように合図し、慎重に音を立てずに扉に近づき耳を当てて中のようすを探る。中からは確かに声が聞こえてきた。おそらく3人、全て女性だ。落ち着いた幼女と、知的な少女、凜々しい女性、声のイメージからはこんな風に取れる。

チルノはワクワクしながら話を聞いたとしといる。俺はビクビクしながら慎重に聞き漏らしのないように意識をドアに向いて向かへた。

「咲夜は大丈夫よ。紅魔館」とこちらに飛びのに力をだいぶん使つたみたい。今は小悪魔が様子を見ているわ」

「流石咲夜さんですね。屋敷にも被害は無いみたいで。妹様も無事です。ただいつも通り暇にしていますが」

彼女たちは外から咲夜とやらの力の使いこちらに来たみたいだ。そして小悪魔という単語から察するに知的な少女は魔術師かなにかだろう。そして報告を聞いている幼女がお嬢様で、一番偉い人物だと予測できる。

「咲夜には何かご褒美をあげないとね。でパチエ？ この幻想郷がどんな所かわかつたかしら？」

「そうね、簡単に言うなら人間と妖怪が共に暮らす温室って所から。そのせいで妖怪の存在意義が薄れて弱体化してゐみたいね」

「嘆かわしいわね。人間や一部の妖怪に飼いならされてるなんて。やっぱり私が動くしかないかしら」

「お嬢様、私は反対です！ なにもここに来てまで争い事なんて…」

「美鈴、知ってるでしょ？ レミイが曲がる訳無いわ。それにこのまま妖怪が弱体化してしまつたら私たちがここに来た意味がないわ」

…

「ふふふ、なら決まりね。幻想郷を支配するわよ。この夜の王ミリア・スカーレットが。ああ、でもその前にフランが暇しているのよね?」

「あらレミア良かつたじゃない。ちょいビデアに向こうに新しいおもちゃがあるみたいよ」

聞きたいことは聞けた。俺はチルノ手を掴み走り出した。行きとは違い足音なんか気にせずに全力に近いスピードで。明らかに彼女が言つたおもちゃはいい意味ではないだろう。その言葉の奥には明らかな死が見えている。逃げなければ死しか待っていない。

「ちょっとくえん逃げなくともいいだろ!?　あいつら悪党なんだろ、なうじいでやつつけないと」

チルノは暢気な事を言つて、戻ろうとするが力任せに付いて来される。

「うつせえ!!　いいから逃げるぞ。あいつらには勝てねえよ俺の最弱の本能がそう言つてる!!」

後ろからドアが開く音がする。あちらは気楽なものだ。妖精と普通以下の人間が相手なのだから。

「人間」ときと妖精が逃げると思つてるの?」

気が付いた時にはすでに大きな蝙蝠の翼をもつた幼女が並走していた。俺は速度を殺して、ごめんと叫びながらチルノを窓に向かって投げつけた。窓は割れチルノは外に飛ばされた。

「人里に行つて、さつき聞いた事を慧音先生に伝えろ……！」

チルノなら大丈夫だろ？。あいつはしょっちゅう喧嘩して、他の妖精に波動拳みたい技を食らつてはいる。窓を突き破つたぐらいならケロッとして飛んでいけるだろ？。

「あら、酷いのね。女の子を窓から放り投げるなんて」

背後にたぶんレミリアだろう、彼女が立つてはいる。暢気なものだ。そして明らかに格下の相手に対する余裕さえ感じれる。

「俺は悪党だからね。それよりもいいのか？　俺よりもあいつを追いかけなくとも？」

「必要ないわね」

「本当は追いかけたいんだる。でも雨だから出来ない、違うか夜の王」

「あら私が吸血鬼ってわかってるの」

後ろを向きながら、腰のホルスターから無駄にじつにナイフを抜き正面に構える。正直言つてこんなものでどうにかなる相手ではない。それでも俺の心を落ち着かせてくれる。

「そんな目立つ羽があれば誰でもわかるや。この窓の少ない屋敷のつくりからもね。吸血鬼なら雨の日に外に出れないって予想が合つたつてよかつたよ」

「なかなか賢いのね、それに面白いわ。そのナイフから血の匂いが

するわね、あなた人を殺めたでしょ。それも1人や2人じゃない、何十人も。幻想郷に暮らす妖怪以上に貴方は妖怪らしいわ。でも所詮は人間、吸血鬼の私にナイフ一本で勝てるかしら、殺人鬼さん」

彼女の言葉が終わると同時に、なんの躊躇いもなくナイフを振りレミリアの首を切りつける。血が間欠泉のようにあふれ出る。返り血で体中が真っ赤に染まる。その光景に俺もレミリアも動搖はしない。両者にとつてこれはあまりにも見飽きた光景なのだろう。

- 幕間 -

喉を切られるという本来は致命傷の傷だが、吸血鬼の再生力の前では、大量の血がレミリアに視界を一瞬だけうばつただけに終わった。しかしその一瞬の間に目の前にいた男は消えていた。目の前にはさつき妖精を使って割つた窓がある。ここから飛び降りたのだろう。そうしなければただの人間が一瞬姿を消せる訳がない。今彼女がいるのは建物の三階だ。流石に死にはしないだろうが、怪我はしているだろう。しかし窓から覗いた地面には男の姿はない。ここから落ちてなお彼は逃げ出したのだ。

レミリアは薄つすらと笑みを浮かべていた。今までに無い経験だったのだ。今まで何百ものヴァンパイアハンターを返り討ちにしてきたが、彼のように躊躇いのない者は誰一人いなかつた。彼女の姿は10歳前後の幼く美しい姿だ。その実態が500年生きている凶悪な吸血鬼だと知つていようが、誰しもがこんな姿の彼女を殺すこと躊躇いを持つていた。しかしあの男は違つた。今まで出会つた敵達の誰よりも弱く、最弱といえた。だが彼はこの姿の彼女に対して何の躊躇いもなく切り付けたのだ。それはどんな妖怪よりも妖怪らしい行動だ。

彼女は笑っていた。これからするのはただ退屈なだけの侵略だと思

つていたが、案外楽しいものになるかもしれないと期待をして。また男に会えると感じていた。それは運命で決められた絶対だと。そして次は名前を聞くのを忘れないようにしよう、そう考え笑っていた。

なんとか生きて人里の近くまで辿り着く事が出来た。まさか幻想郷に来る前に3階から突き落とされたという稀有な経験が生かされることは思つていなかつた。あの時は散々ばこぼこに殴られてから突き落とされたが、今回は怪我も無く、吸血鬼の血を浴びて自分から飛び降りれたのが幸いした。吸血鬼の血には高い治癒力があるらしい。思いつ切り昔漫画で呼んだ知識だったが本当のことであつた。何箇所も骨折したが直ぐに回復してくれた。もし血に治癒力がなくても走つて逃げるつもりだったので、どちらでもよかつたが。前の時は骨折した状態で走つた逃げたのだ、今回も出来ると踏んでの行動だ。

吸血鬼を殺すつもりで一太刀浴びせたが、あの程度では死んでいいだろう。それでも傷が回復するまでは足止めにはなるだろう。1日か2日か、流石に半日以下は無いと思う。とにかくこの間に人里まで行つて対策を練るのを手伝わないといけない。チルノが慧音に吸血鬼の侵略計画のことを伝えてると思うが、バカだから上手く伝えてないだろ？。しかし俺の意識はある時のように、突然落ちていつた。

俺は実家の自分の部屋にいた。そしてこれが夢だと直ぐに気が付いた。ここはもう存在しない場所なのだ。俺が壊した、俺が壊したはずの場所なんだ。俺はあの時と同じように部屋を出て階段を下りて居間に向かつた。やっぱり目の前にはあの光景が広がつていた。吐き気が込み上げてくる。たまらず胃の内容物を全て床に撒き散らした。俺は再度その光景を眺め、そしてあれを見て俺の体温が下がっていくのを感じる。

気が付いたら俺は布団の中で横になっていた。俺の部屋ではないが、よく知っている場所だ。俺が人里に来てからしばらくの間お世話になっていた慧音の家の一室だ。

まだ身体が寒い。あんな夢を見た後だからしかたはないだろう。しかし一向の体温があがる気配がない。むしろ体温が下がっていくばかりだ、特に布団の中が。そこでやっと気が付いた。布団の中に違和感があることに。ため息と共に布団をめくるとチルノが一緒に寝てるではないか。彼女は氷の妖精だ。そして普段から冷気が駄々漏れの状態である。これは凍死しなかつただけでも有難かったのかもしない。

服はある時着ていたものではなく、浴衣になっていた。それもそうか、あの服は血まみれになっていたのだから。チルノを起こさないよう立ち上がり慧音を探すことにした。御礼と今の状況を聞くために。

思つたよりも簡単に慧音を見つけることができた。彼女は玄関先で里の人間に指示をだしていた。邪魔をしないように壁にもたれ話を終わるのを待つていると、数分で終わり、里の人は各自の行動の為に動きだした。

「悪いな。病人に気を使わせてしまって。しかし今は少しの時間も惜しいのだ」

「まあ事情はわかるのでお気遣い無く。てかすいません。なんかチルノ共々迷惑をかけたみたいで」

「それこそ気を使わないでくれ。君とチルノのお陰ですばやい行動ができたのだから」

俺は3日間寝ていたらしい。その間の事を慧音が教えてくれた。

チルノが先生の所に来たときは誰も信じていなかつたらしい。いつもの悪戯の一環だと。悪人が幻想郷を侵略しに来たなど信じはしないだろう。しかしチルノの慌てようと、俺が里のどこにもいないうちによつて俺の搜索が始まることになったのだ。俺はすぐに見つかった。そして血まみれの俺の姿を見て事態は動き出した。里の自警団による警備が始まったのだ。そして何が起きているのか完璧に理解したのは次に日の夜であつた。吸血鬼、レミリア・スカーレットが幻想郷への宣戦布告を行つたことによつて。

「現状はこんなところだ。今は妖怪の山を攻め落とそうと彼らはしている。その片手間で里にも兵を送り込んでる。妹紅や少數の妖怪、妖精のお陰でなんとかなつてるが時間の問題だろうな」

「待つてください。おかしいです。紅魔館にはそんな戦力は無いはずです。侵入した時には……」

「たしかに紅魔館の戦力は吸血鬼に魔女、赤髪の妖怪、あとは魔女の使い魔程度だ。だがな幻想郷の妖怪が裏切つたのだ。今の自由に人間を襲えないことに不満がある者たちが」

そんな事を言つたら河童や天狗以外のある程度以上の力を持つてゐる妖怪は裏切つてゐるだろう。いくら河童、天狗が一大勢力といえ今勢いがあるのは紅魔館陣営だ。妖怪の山が落ちるのも時間の問題だ。

「かといって諦める訳にはいかない。」のままあいつらの良いようになる訳にはいかない

俺から見ても慧音は焦っている。それもそうだ、俺が生きている時間よりも長く彼女はこの里を守ってきた。それがたかが数日で崩れ去ろうとしているのだ。焦らないわけがない。

「ひとつ可能性があるとしたら、相手のトップ、レミリアをどうにかするって事ですね。妖怪が弱体化している今幻想郷を裏切れるのは吸血鬼のカリスマに当たられたかにすぎない。ならレミリアをどうにかしたらこの異変を止めれます」

「だがくえん。今山も里も守りに必死だ。とてもトップを狙う余裕はない」

確かにそうだろう。だが戦力を割く必要はない。方法は2つある、そして俺にしか出来ないことだろう。それに失敗してもどうにかなる、まだ肝心な役者がまだ舞台に上がっていないのだから。役者が出揃う前にけりが付くのが一番いいのだろうが。

色を無くした決意

俺が目を覚ました晩から戦闘は過激になつた。里の人は妹紅と慧音先生を中心に、妖精はチルノと大妖精を中心に戦い何とか戦況を保っている。夜が明けるまで持ち堪えれば何とか今日も乗り切れるだろう。そんな一大事に俺は戦地から遠くにいた。俺には何も出来ない、簡単なお札さえ使えない俺が戦場に立つても足手まといになるだけだ。俺に出来ることなんて雑貨屋の店主かナイフを振り回すだけだ。

そんな役立たずな俺は一人で行動していた。俺を戦力として動かすには一対一の状況に持ち込むしかない。それはそうだ、あんな靈力や妖力の弾が飛び交うなかナイフ一本で出来ることなんてない。せいぜい的になるだけだ。戦闘の基本は数。その観点から見ても俺が一対一で敵を倒しても意味が無いだろう。だが例外もある、例えば敵のリーダー格だ。そいつさえ叩けば相手の士気を削ぐ事になる。それが最弱の俺が出来る唯一の戦い方だろう。本来ならそれは博麗の巫女の仕事だが、まだ幼い彼女には無理だろう、だから巫女の代わりを俺がすることにいた。それに里には戦力を割く余裕はないのだ、戦力外の俺が動くしかない。

「と来たのはいいが、やっぱり上手く行く訳ないよな」

木の陰から双眼鏡で紅魔館の様子を見ている。そこには1人、赤髪の女性が門の前に立つていて。恐らく門番だろう、しかも妖怪っぽい。一対一でも勝てる訳がない。実際は戦わなくともいいのだが、戦闘になる可能性を考えると恐怖でしかない。俺の戦闘の勝利条件はレミリア・スカーレットを交渉のテーブルに着かせることだ。本当に神に仕える巫女の代行らしい平和的な行動が目的だ。しかし交渉に行き着くまでに戦闘になる可能性はある。このまま幻想

郷を支配したほうが明らかに紅魔館側には利益が有るのだから。

「第一プランが失敗した今これしかないんだけどな」

ここに来る前にすでに行動を起こしていた。まだ戦闘に参加していない戦力を味方に引き込み戦況を引っくり返すというものだ。それによつて相手を交渉のテーブルに着かせやすく作戦だつた。事は數時間前に戻る。

久しぶりに来たここは相いも変わらずジメジメしていた。それもそ.udここは地下でもつと下つて行けば旧灼熱地獄があるのであるから。周りのちよつとした水分は蒸発して逃げ場の無く籠つている。ちよつとしたサウナみたいなものだ。絶対にチルノとは一緒に行くことは出来ないだろ？

「おつわざわざ出迎えかい、さとりに勇儀の姉さん」

地下にある旧都近くの道に彼女たちが立つていた。2人とも地下の有力者だ。怨靈や灼熱地獄の管理をしている地靈殿の主、古明地さとり、地底の妖怪たちのまとめ役でもある鬼の星熊 勇儀。

「まあそんな感じだ。思つたより元気そうにやつてるじゃないか、くえん」

「姉さん、あの時のお礼や積もる話もありますけど、今は急いでるのでまた後日にでも。さとりには説明不要だから省くけど、手伝つてもらえる？」

こんな急いでいるときにはさとりの能力は便利でありがたい。ここに住む多くの妖怪や一部の人間の中に能力を待つて生まれるもののが

いる。妹紅なら『老いることも死ぬこともない程度の能力』慧音なら『歴史を食べる程度の能力』そして目の前にいるさとりなら『心を読む程度の能力』だ。言つて字の通り彼女は心を読むことが出来る。俺がこの場所に来た段階でどうしてここに来たのか理解しているだろう。

「吸血鬼と戦うのを手伝つて欲しいのね。くえん、悪いけれどもそれはできないわ」

「さとりの言つとおりだ。お前の頼みといえどもそれはできない」「まつでしうね。事情を知つてゐから期待はしてなかつたですけど」

地底に住む妖怪たちは地上の存在に嫌われてしまつた者たちだ。その彼らが力を貸してくれるとは思つていなかつた。それも交渉道具として、戦地に向かうなんて了解してくれないのはわかっていた。期待はしていなかつたが、藁をも掴む想いでここにきたのだ、多少のショックと絶望は抱えてしまつ。

「は……。悪かった。じゃあ俺は戻るよ。次にまた会えたら酒でも飲みましょう」

「待ちなさい。手伝えない代わりにひとつ教えてあげるわ

諦めて帰ろうとしていた俺はさとりに呼び止められた。

ため息、そんな訳で俺の第一プランは失敗に終わり、こうして命がけの交渉に向かうことになつたのだ。さとりから勝利への可能性を教えてもらつて来ている訳だが、教えてもらった内容も、ナイフが

勝利への鍵というなんとも微妙なものだ。これは俺が唯一外の世界から持ってきたものだ。けして銀製で吸血鬼に効果的な武器つて訳ではない。正直なところ、人里で手に入るナイフのほうが使い勝手がいい。無駄に重くナイフとしても使い辛く、かといって剣のようないーチもない。無駄にごつく、普通のナイフのように投げることも不可能で、ただ振り回すしかできない代物だ。それでも俺がこのナイフを使っているのは一種の呪いかもしれない。

ため息ひとつ。迷っている暇はない。今妖怪の山は襲われている。紅魔館の主力と思われる魔女の手によって。そして人里には雑多妖怪どもが襲っている。このチャンスを逃すわけにはいかない、この紅魔館の守りが薄くなっているタイミングを。このチャンスを逃せばレミリアを交渉のテーブルに着かせるることは出来ないだろう。彼女が幻想郷に対して油断している今しかない。

ナイフを握り締める。心が真っ白になっていく。迷いや恐怖心が消えていく。ただやらないといけない、俺の使命を遂行する為だけの機械に心が変わっていく。紅魔館を真っ直ぐ見据え歩きだした。

対決 拳術使い

俺は赤髪の女性を真っ直ぐ見据えている。最終目的は交渉だ。だからいきなり攻撃するつもりはない。あくまでも正々堂々。

「俺は紀伊田 くえんという人間だ。ここに主に用が有つてきた」

女性は俺を審査するよつて上から下まで見る。

「すいませんがお嬢様とアポがない方を通す訳にはいきません。それにお嬢様を切りつけた侵入者を通す門番もいませんよ」

こうなるのは当たり前だろう。どう考へても俺の特徴は門番に伝わっているのが普通だ。いくら生きて逃げるためとはい、いきなり切つたのは軽率だった。しかしここで引いたら来た意味がない。いや、それ以前に狼藉者を逃がしてくれる程優しくないだろう。

「俺にも事情があつてね。無理にでも通ると言つたら?」

「この紅 美鈴がお相手いたします」

美鈴が構えをとる。よく知らないが中国拳法の構えだと思う。昔読んでいた漫画で見たことがある。そのせいで中国拳法イコール強いイメージがある。しかし戦闘が避けられないことはわかつっていたのだ。ただやらないといけない事の為に足搔くだけだ。

「ならお手並み拝見だ。門番さん!」

一気に距離を詰めナイフを真っ直ぐ突き出す。しかしいとも簡単に

避けられ拳が鳩尾に入る。そして蹴りが俺の身体を吹き飛ばした。

「貴方何者ですか？ 殺すつもりで攻撃したのですが、なんで生きてるんです？ 特に靈力で防いだ感じもありませんし」

のそのそと立ち上がり、ナイフを正面に美鈴を見据える。

「御生憎さま、最弱の俺は強者に蹂躪されるのは慣れてるからね」

「そうですか。なら死ぬまで攻めるまでです」

そして彼女は言葉通りの猛攻を開始した。正確に額、こめかみ、顎、喉、鳩尾、肩口などの急所を拳や脚の多彩な技で攻撃してくる。防御など間に合ひわけも無く、ワンサイドゲームが続く。しばらくして猛攻が終わつた時、俺は血まみれになつていた。それでもまだ生きている。普通ならショック死しているだろう。しかし前にもこのよううに一方的に殴られた俺には抗体がある。だから普通なら死ぬほど攻撃を放つた直後を狙い、ナイフで美鈴の腹に一撃を入れてやつた。

彼女は突然の攻撃に対して距離をとり、撃目が来ることに對し対処した。妖怪の彼女にしたら腹の刺し傷程度ならば致命傷にならない。しかし彼女の瞳には戸惑いの色が有つた。彼女の拳法は素晴らしい。全く武芸の心得の無い俺でも格の違いがわかるほどのものだ。だからこそ彼女は誇りにしていたのだろう。だが目の前にある光景はその誇りをぶち壊す光景だ。誇りにしていた拳法で明らかに格下の相手をして、絶対に死ぬはずの攻撃を過剰に放つたのだ。なのに相手は生きており、ましてや反撃までしたのだ。傷の痛みと相乗して、目の前の俺は彼女を戸惑わせた。

「本当に貴方は何者ですか……。いえ本当に人間なのですか！？」

「人間ではないかもしないね。殺人鬼だから鬼かもしない。もしかしたら死神かもしない」

自分でも左右に揺れているのを自覚しながら再度ナイフ構え直す。正直俺から攻める体力など有る訳がない。こうしてナイフを構えているのでやつとなのだ。ただ真っ直ぐ彼女を見据える。美鈴が踏み込むのを確認してナイフを振るう。彼女の妖怪という高いポテンシャルは、人間の身体では着いていけるない。だが攻めるタイミングさえわかれば攻撃することが出来る。相手の攻撃にあわせてナイフを振るう。振るつたナイフが彼女の肩にかかる。代わりに拳をもろに食らう形になってしまった。再度攻撃を食らいながらナイフを突き出しがいとも簡単に捌かれてしまった。そして再度必殺の一撃を食らう。

肋骨が折れる感覚がする。何本かが肺に刺さり、中が血で満たされ呼吸がしづらくなってしまった。飛んでくる蹴りを何とか腕で防ぐが、腕ごとへし折られた。そこに追撃の一撃が突き刺さる。なんとか身体の軸をずらして直撃を避けるが、かすった腕が動かなくなってしまった。苦し紛れで美鈴に身体を押し付けて攻撃の勢いを殺そうとしてみる。しかし流石は達人だつた。ワンインチパンチ、そんなところだろう腹に当たられた掌で内臓がシャツフルされてしまう。大量の血を吐き出す。それでも彼女から離れまいとするが。次は間接を捕られ起こっていた腕をへし折られた。その勢いで地面に叩き付けられた。肺の空気が抜け、一瞬頭の中が真っ白になる。

「諦めなさい。このままでは苦しんで死ぬだけです。貴方は人間にしては頑張りました。その頑張りに免じて最後の一撃は苦しまないようになりますから」

「お優しいことですね……。だがまだまだ。俺はあんたより強いやつと戦つたことがあるんだよ。だからまだっ」

腕を中心に地面に押さえられつけられ、立ち上がることも、身体を動かすことも出来ない。俺の命は美鈴に握られているも同然だ。それでも諦める訳にはいかない。俺は俺の理想郷を守るためにここにきたのだ。そして何よりも罪を償うために来たのだ。いくら善行を積もうと許されるはずは無いが、それでもないもしなければ変わらない。だからここにいるのだ。

ガンッ。衝撃が身を駆け巡る。無理やり俺の意識は美鈴に刈り取られた。

俺は夢を見ている、あの時の夢を。走馬灯だらうか、それとも死んだ俺の魂が裁かれる為の下準備なのだろうか。俺はあの時の夢を見た。

大学は半年もからずに辞めてしまった。俺には結局学校は合わなかつたのだ。あのやりたくも無いことを無理やり詰め込まれる場所は。大学を辞めた俺はフリーターになった、時給830円、地方都市のチエーンのレストランで。店長やエリアマネージャーには正社員になることを進められたが、フリーターというスタイルを貫いた。そんな俺を家族は避けている。当たり前だろう、高い金を払って育てた子供はフリーターで社員になるつもりはない、俺の考えている事がわからないのだろう。でも、妹だけは俺のことをさけなつかつた。昔のまま、仲のいい兄妹でいてくれた。年が離れていたのが良かったのかもしれない、それに馬鹿だったから良かったのかもしれない。どんな理由でも家に居場所が無かつた俺の救いになつたのは変わりない。

「おいつれもん、また俺の漫画勝手に持つて行つたら

妹の部屋にノックも無く入る。いつも妹のれもんは俺の漫画を勝手に持つて行く。それだけなら良いが、けして本棚に返すことはないのだ。仕事が続いたときなど本棚の半分がれもんの部屋にある事なんぞやうだ。

「くえんいいじやないの。ビツセ同じ家にはあるんだから

俺はため息を吐き呆れる。

「たしかにそうだけじよ、元合った場所に返すのは常識だろ」

「もひ、常識なんかに囚われて、そんなのじゃ人生楽しくないよ」

適当に流しながら、呆れて俺はベットに座る。

「はあ、お前はホントに根性してるよ、兄を呼び捨てるし、常識に囚われないし」

「えへへ、すいこでしょ」

褒めてない、そう突っ込みながら再度ため息を吐く。

「そんなことはいいや」

「え？ 漫画返さなくていいの？」

「漫画はちやんと返せ。そういうじやなくて、お前誕生日近いだろ。欲しい物ないのか？ なんか買つてやるから欲しい物をひとつ言え」

そり今日は誕生日が近いれもんの欲しい物を聞くために来たのだ。

「プレゼント？ 特には無いんだけどな。何でもいいよ、そういうのは気持ちが嬉しいし」

彼女は可愛く笑った。その頭を撫でてやるとからかうに嬉しそうに笑つた。

数日がたち、れもんの誕生日当日になつた。今日はバイトも休みを

とり、彼女を連れて買い物に行くつもりだ。結局プレゼントは買つてない。何でもいい、その一番難しい答えに困った俺は即日買い物に付き合つこにしたのだ。プレゼントはその時に欲しがっていたものを買ってやればいいだらう。

なんだかんだで昼まで寝ていた俺は、一応誕生日ということで一張羅の黒のサマー・コートに着替えて、妹の部屋へと向かつた。だが彼女はそこにいなかつた。どうせ居間でTVでも見てるのだろう、あまり両親と顔を合わせたくはなかつたが、仕方なく今に向かつことにした。

階段をゆっくりと下りていく、居間の扉を開く、しかしそこは見慣れた居間ではなかつた。有るのは赤、赤、赤赤赤赤赤赤赤赤あかあかあかあかあかあかあかあかあか。俺は吐き気が我慢できずに、しゃがみ込み吐き続けた。しばらくして出せるものは無くなつたが、まだ吐き続ける。空っぽの胃からは出てきたものは胃液だった。いつたい何が起きているのか理解が追いつかない。目の前には元は両親だった物がぱらぱらに散らばつている。

「くえん、汚いよ。いい歳なんだから、吐くなら洗面所にしてよ

妹の声だ。しかしその声はあまりにもいつも通りだつた。よく飲みすぎて吐く俺をからかうその声色だつた。下に向けていた顔を上げるとそこにはれもんが、赤く化粧したれもんが立つていて。そして右手には銀色に輝く、まだ幼い彼女には似合わない、むだにじついナイフが握られていた。

「おい、れもんこれはなんだよ」

本当は聞きたくなかった。聞いてしまつたらもう戻れないと心が危

険信号をあげている。なのに俺の口は聞いてしまった。

「んーとね」

答えるな、答えるな、必死に心の中で念じ続ける。しかし彼女は答えてしまった。それは俺が予想していたもので、一番外れて欲しい予想だった。

「私ね、お父さんもお母さんも殺したの。バラバラにしたんだよ！樂しかったな。ねえくえん、やっぱり常識に囚われたら人生楽しめないんだよ」

可愛い笑顔だった、それは覚えている。次に俺が気が付いた時、俺は彼女に馬乗りになり、無駄にごついナイフでれもんを殺していた。俺は恐怖したのだ、れもんに。彼女が次は俺を殺すかもしれないといだから殺される前に彼女を殺してしまった。なんで彼女に殺されなかつたのだろうか。そのほうが良かつたのだ。俺の弱さが憎い。声も出せずに俺は泣いていた。

しばらくの間俺は血まみれの居間で泣いていた。今日はれもんの誕生日と一緒に買い物に行って、プレゼントを買ってやる。そんな平和な一日の予定だったのに、どうしてこうなったのだろうか。れもんにプレゼントをあげないと、せっかくの誕生日なのだから。

俺は立ち上がり、れもんに刺したままのナイフを抜いた。れもんに誕生日プレゼントをあげよう。気が狂ったフリーーターの男が家族を殺した、そだお袋も親父もれもんも俺が殺した。れもんに罪を着せない、それが俺の出来るプレゼントだ。その台本を確かにする為に俺は家を出た、外はまだ梅雨まえの冷たい雨だった。

絶望の果て

街は悲鳴で溢れていた。それもそうだろう、真っ黒なサマーライダースを着た男がナイフを振るい人々と人を殺しているのだから。ああ、まるで死神だな、俺はまだ幼い少女を切りつけながらそんなことを思っていた。まるで俺の心には色がない、だから感情もなく、他人事のように見れるにだろう。

刺された少女は倒れこみ一緒にいた少年に受け止められた。それを見ていた周りの大人が俺に襲い掛かってくるが、人々と喉を切り、殺していく。ただ素振りでもしているかのよつだ、何も感じない。

ふらふらと歩きそこにいる人を殺して歩いた。中には妹や彼女を殺され、恐怖に逃げた者もいた、そんな行動が俺を救ってくれる。あの時れもんを殺してしまった俺の行動を許してくれた。だから俺は殺し続けた、れもんの罪を被る為に、俺自身を正当化するために。

いつたい何人の人を殺したのだろうか、覚えていない。俺は警察に追われた。そしてなんとか昔潰れた病院に逃げ込むことが出来た。俺の手は真っ赤に染まっていたが、ナイフは赤には染まつていなかつた。まだ足りないのかもしれない。このナイフが赤に染まるまで続けないといけないのかもしれない。

その時1人の女性が現れた。彼女は豊満な体を真っ赤なライダースに身をくるんでいた。俺はれもんの為に、彼女を殺す為の走り出した。そして浴びたのは返り血ではなく、強烈な蹴りだった。

「よお死神、悪さが過ぎたな。お姉さんが成敗してやんよ」

俺は無言でナイフを振るつた。しかしその軌道は女を傷つけることはなかつた。そして彼女はまるで遊んでいるかのように、オラオラと叫びながら拳を叩き込んでくる。ワンサイドゲームでさえない、ただサンドバック相手にシャドーボクシングしている感じだ。体中の骨が折れていく。いたるところがナイフで切られたかのように裂けていく。これで生きているのが不思議でならないが、女が死なないよう手加減しているのだろう。最強、その言葉が頭に浮かんだ。俺ではこの女に勝つことはできない、殺すことが出来ない。俺はここが3階といふことも忘れて窓から飛び降りた。

俺は走つていた。窓から飛び降りたせいで足の骨にひびが入つたが、とにかく走つて逃げていた。純粹な恐怖から逃げ続けていた。女が俺に与えた死への恐怖が罪への恐怖をつれて来た。妹を殺した罪、多くの無関係の人を殺した罪、それが俺を追いかけてくる。いくら走つても、走つても逃げる事は出来ない。

こける、立ち上がつてまた走る。血を吐く、呼吸が出来ない。酸素が足りない。それでも走る。ついに俺の足は動かなくなつてしまつた。

「すげな、死神の兄ちゃん。普通なら走ることさえ出来ない傷にな」

女が背後から迫つてきた。俺は這いながら、みつともなく今も逃げよつと続けていた。

「逃げるな、逃げるな。別に殺しはしないよ。罪を償つてもうつだけだ。その結果死んでしまうかもしれないけどな」

彼女の蹴りがわき腹に飛び込み、もだえ苦しむ。血を大量に吐き小

さな水溜りを作った。許しを請おうにも喋る」とさえ出来ない。だから俺はみつともなく、いまだに逃げようと足掻いている。

「お前がどうしてあんな奇行に走ったかは私は知らないが、人を殺したんだ。その罪は償わないとな」

彼女のブーツが俺の右をナイフごと踏み潰した。痛みで悲鳴を上げる。もう逃げるという行為をえ叶わない。小さく俺の口は殺さないでくれと呟きはじめた。

「死にたくないよな。でもそんな人間をお前は殺したんだ。そんなお前が殺さないでくれと懇願できる立場ではないだろ」

殺さないでくれ。

「やつだな、お前は地獄に落ちろ」

俺の意思は女の蹴りで刈り取られてしまった。

目を覚ますと俺は真っ赤な広間に転がっていた。身体の怪我には荒く包帯が巻かれている。死なない程度の手当でだ。真っ赤な部屋といつこのことは紅魔館の中なのだろう。てっきり殺されたものだと思っていた。思えば、あの時も殺されたと思った俺は幻想郷に迷い込んでいた。あの時から悪運だけはいいみたいだ。

「やつとお田覚めかしら、殺人鬼さん」

聞き覚えがある声に顔を向けると、ヘミリア・スカーレットが大きな玉座に身を埋めていた。

「ふふふ、美鈴が貴方を殺しかけた時は焦つたわ。貴方とはもう一度話がしたかつたもの」

「どうやら彼女の気まぐれで俺は生かされているらしい。これは有り難いことなのかもしねえ。どんな状況にしろ眞的であるレニアードの前に行くことが出来たのだから。

「そりやあ寛大なお心で。俺を生かすついでに今やつてる慢駄もやめてくれたら嬉しいんだけど」

「ずいぶん肝が据わっているのね。その怪我で私にそんな軽口を叩けるなんて」

「じゃないとこんな所に一人で来ないさ」

とてもじゃないが逃げる事は出来ないだろ。この怪我だ、前のように逃げ切るなんてことはまず出来ない。そして助けも来ない、慧音の妹紅もチルノの今は別の場所で戦っているだろ。つまり自分の力だけでこの場を切り抜けなければならない。あの女に一方的にやられた時に近い絶望感がある。それでもどうにかしないいけない、生きる為に。

俺はレミリアと向き合った様子を探つてゐる。しばらくの間無言が続いた。レミリアは俺を吟味するかのように目を走らせてゐる。吟味が終わったのか彼女が無言を壊した。

「やっぱり貴方はただの人間ね。能力もなければ、靈力も普通以下の雑魚ね。でもその貴方が今も生きている。美鈴は種族としては正直弱い妖怪だわ、でも武術のお陰でそこらの妖怪にも負けない猛者なの。その彼女が殺す気で戦つたのに貴方は生きている、これは運がいいなんて問題じやない、いつたいどんなトリックを使ったの？」

「さあね、俺にもさっぱりだよ。運が良かつたとしかいえないよ」

「運ね……。このナイフに何かあると思ったのだけど、何にも無かつたわ。こらないから返すわ」

彼女は俺のナイフを投げて地面に突き刺した。普通なら投げるなんて出来ない代物だが、流石は吸血鬼だ。種族としての違いを見せつけられる。

「いいのか、ナイフを返しても。敵に武器を返すなんて

「別に構わないわ。それに貴方がそれを持ってなかつたら面白くないもの。私は貴方を気についている。人を、命を殺すことについて躊躇いを持たない貴方のことを。だから特別にチャンスをあげるわ。貴方が私に勝つことが出来たら交渉とやらのテーブルについてあげる、私の僕になるなら命は助けてあげる。悪い話ではないと思うわ

どう足搔いても俺の力ではレミリアに勝つことは出来ない、それでも俺は戦いに来たのだ。生きるために、罪を償うために。あの女は俺を地獄に落とすつもりだつた。本当に地獄だ、目の前の敵は鬼で悪魔だ。まさか旧地獄の次は地獄の住人と死闘なんてことになるなんて。

ナイフを引き抜き正面に構える。心の色が無くなつていく。恐怖も絶望も色をなくしていく。

「これが答えた、西洋の鬼」

「残念だわ、ここで貴方を殺す運命になるなんて。最期に貴方の名前を教えて」

「紀伊呂 くえん。殺人鬼、鬼に墮ちた男だ」

「そう、くえん。今日は月が紅くて機嫌がいいの、だから本気で遊んであげる」

轟音、彼女は轟音を上げて移動した。幻想郷には天狗という最速の種族がいる。そのスピードには負けるだろうが、人間の俺には変わりはない。どちらにしても目では追えないのだから。動かないよりもまし程度で身体動かす。羽が左腕に引っかかる感覚と同時に腕が吹き飛んだ。身体に巻いてあつた包帯を腕に巻きつけ止血するが、こんな事でどうこうなる傷ではない。

「人間つて不便ね。片腕が無くなつただけでも致命傷なんだから」

天井近くにレミリアが飛んでいる。その周りには赤い魔方陣が浮かび俺を狙っている。

「ああ、もうピンチよ……じつする、くえん」

赤い蝙蝠たちが魔方陣から飛び出し俺に向かつ、残った右腕でナイフを振るい蝙蝠を切りながら射線から逃げる。ナイフは壊れることは無かつたが切りつけた衝撃だけで腕が痺れ感覚がなくなる。

「まだよ……」

全方向に高エネルギーの紅い魔力をばら撒き始めた。この次元になると人間が知恵や運でどうにかできるものではない。ただ死ぬのを待つしかない。俺は真っ赤な濁流に飲み込まれた。そして周りの色が消えた。しかし俺は消えることは無かつた。本当なら蒸発してもおかしくないエネルギーの中に俺はいる。そして俺の周りだけ色がない灰色の世界に変わっている。理解が出来ないが、これはチャンスだ。俺は走る、そして魔力を踏み台にしてレミリアに切りかかる。やっと届いた一撃。

彼女は舌打ちをし俺と距離をとる。俺は地面に着地し正面から見据える、彼女が飛んでる限り俺からは攻撃は出来ない。

「いつたいなにをした。ただの人間が出来る芸当じゃないわ

「さあね。そんなに気になるなら試してみな

安い挑発だ、だが効果はあった。彼女は一直線に俺に向かつてくる。それを正面からナイフで受け止め蹴りを入れる。おかしなことが起きた。ただの人間の蹴りがダメージになつたのだ。いや吸血鬼の一撃を片手で受けれる時点でおかしい。普通ならミンチになるはずだ。だが俺はなんとも無い、むしろ怪我しているのが嘘のようだ。

「人間」ときが舐めるな！！」

彼女の掌を中心に魔方陣が浮かぶ。

「スピア・ザ・グングール！！」

深紅の槍が現れる。流石に俺でも知っている。北欧神話に登場する必殺必中の槍だ。その槍を手に彼女は攻める、それに対しても俺はナイフで捌き続ける。吸血鬼の力、速さと対等に。永遠に続くと思える攻めき合いを崩したのはレミリアだった。彼女自身を中心に魔力が爆発し、吹き飛ばされてしまったのだ。

「「はあはあ」「

思つたよりも体力を消耗してしまっている。それもそうだろう2人の力が拮抗したのだから。

「そのナイフね。そのナイフが貴方と私の種族の壁を壊している

そして思い出す。さとりがナイフが鍵と言っていた。だが勝利と言うにはまだ足りない。決定打が無いことには変わりが無い。心を落ち着けナイフに意識を向けていく、そして何かが重なる音がした。

『色に染まらない程度の能力』それがナイフの正体。このナイフが能力そのもの、能力の塊なのだ。思えば俺は運がいでは片付けれない経験ばかりしている。色に染まらない、その本質は何者にも影響されないことだろう、だからこそ俺は生き残った。いつも死に掛けた時はナイフを持っていた。無意識に能力を引き出していたのだろう。わかれれば簡単だ、意識して能力を引き出してやればいいだけだ。

「たつぐ……。最弱でいるつもりが、こんな事になるとほな。紅い
月の時間はお終いだ、レミリア・スカーレット」

世界の色が消えた。

終劇

-幕間-

世界が色を無くした。真っ赤だった広間は灰色に染まり、生氣も気配も何も無世界へと変わり果てた。私の目の前にいる男、紀伊呂くえん。彼が原因で世界が変わり果てたのだろうが、彼からは何も感じない。そこに居るのかさえ分からぬ。私、レミリア・スカーレットには能力がある。『運命を操る程度の能力』私自身もどうな能力なのか分かつていい。私には運命が見え、稀だが運命自体を捻じ曲げることができる。その私をもつてしても彼の運命を覗くことが出来ない。まるでそこに居ないかのような感覚だ。いや、なにものにも影響されぬ、それが本質なのだろう。何にも影響されない、恐ろしい存在だ。私は本物の化物を目覚めさせてしまったかもしれない。しかし私は勝たないといけない。勝つて幻想郷を支配して平和な暮らしを手に入れる為に。妹が、フランが生きていける世界を作るためにも。

『スカーレットマイスター』

魔力の濁流で彼を襲う為に魔法を練るが、技が発動されぬ。この空間 자체が魔法の発動を拒否、いやこの空間が魔力の影響を受けない為に発動しないのだろう。つまり私はもう魔法を使うことが出来ない。吸血鬼としての力と握り締めているグングニルだけで目の前の男と戦うことになる。

-開劇-

世界の色が消えた。灰色の世界でレミリアと向かい合つ。ここからは何にも影響されない戦いだ。純粹な魂と魂のぶつかり合い、そこには種族の壁も影響しない。

先に動いたのはレミリアだつた。槍を使っての突撃。彼女は一撃で戦いを終わらせるつもりなのだろう。それに答えるべきだ。タイミングを合わせてナイフを突き出す。槍とナイフの切つ先がぶつかり合い凄まじい衝撃が生まれた。最強の槍と、何にも影響されないナイフは衝撃に耐えることができる。しかし使い手の俺やレミリアはこの衝撃に耐えることが出来ない。衝撃で皮膚が裂け、腕や足の筋肉が破裂する。だがここは何も影響がない色を無くした世界、怪我など影響することはない。唯一影響するとすれば心だけ。俺は能力を使い続け、レミリアは能力に呑まれないように抵抗する。心の強さで全てが決まる。心が先に折れた方が負ける。

彼女は何の為に戦っているのだろうか。いつたい何の為に幻想郷の侵略など思い立つたのだろうか。どのような理由が有るのかは俺には分からぬ。もしかしたら大義名文があつて行っているのかもしない。だが負ける訳にはいかない。俺にも負けられない理由がある。妹紅に聞かれた、なぜチルノに執着してゐるのか、なぜチルノを友達と呼ぶのか、全ては妹だ。俺はまだ幼く少し馬鹿なチルノに妹を重ねているのだろう。俺は妹の為に鬼にまで堕ちた。そして俺は妹を助けるどころか殺してしまつた。だからこそ今度こそは、守らないといけない。それになんだかんだで気についているのだ幻想郷を。この優しくも残酷な世界のことが。だからこの地で俺は罪を償う為に生きる。最弱をもつとうに生きる俺の唯一譲れないものの為に。身体が力が最弱であろうとも、あの時何も出来なかつた最弱であろうとも、今だけは守る為に、償いの為に、心だけでも最強で有る為に、俺は折れない。

爆音、そして世界が色を取り戻した。俺は生きている。押し負けたのはレミリアの方だつた。身体もぼろぼろになりグングニルも折れ倒れていた。吸血鬼と殺人鬼の戦いは殺人鬼の勝ちに終わったのだ。

「俺の勝ちだな。約束どおりに交渉のテーブルに着いてもらひ」

「あら、優しいのね。今なら私を殺せるわよ、そうすれば簡単に終わるわ」

レニアは目を合わせることなく、倒れたまま答えた。たしかにこのまま彼女を殺せば全ては解決するだろう。裏切った妖怪も彼女が失脚したことで勢いをなくし纏まりもなくす。そうなれば後はどうともなる。交渉よりも簡単のことだらう。だが。

「殺さないよ。幼い女の子なんて殺すつもりはないよ」

「あら口つゝンなの、貴方は」

何とでも言えぱいい。なんとなくだ、なんとなく殺す気にはなれなかつたのだ。あの時妹を殺した俺には戻りたくなかつたから。

「ひとついいか、何で侵略を始めた。そんな事をしなくとも幻想郷はお前たちを受け入れたのに」

「普段なら言いたくなつて蹴るけど、私に勝つた御褒美に教えてあげる。私には妹がいるの、あまりにも強すぎる能力を持つた妹が。そのせいで彼女は、フランは狂気に触れてしまつた。外ではもう暮らせない、強すぎるあの子は世界のバランスを壊してしまうわ。そしていつかあの子は滅ぼされる。だからここに逃げ込んだの。でもね、この世界の妖怪は弱体化しきっている。こんな世界だつたらあの子が簡単に壊してしまつ。だから私は妖怪が強い存在としている世界を望んだの。あの子が幸せに、普通に暮らせる世界を作るために」

レミコアは俺と似ているのかもしない。そとでは妹になにも出来なくて、だからここに逃げ込んできた。そして妹の為に戦っていた。

「約束は守るわ。紅魔館は即刻戦闘行為を止め、交渉に着く」

その言葉と共に2匹の紅い蝙蝠が彼女の傍から、屋敷の外へ飛び立つた。1匹は山へ、もう1匹は里へ向かつたのだろう。

「負けたはずなのに気持ちが楽になったわ。これで良かったのかもしないわ。ごめんなさい、交渉はしばらく後にはじめるわ。少し眠りたいの、今ならゆっくり眠れそう」

彼女は眠った。その姿は夜の王、恐ろしき吸血鬼には見えなかつた。ただ妹を純粋に心配する少女だつた。

これでこの異変は解決へと向かつて行くだろう。そして俺の役目も終わつた。後の事は偉い人に任せればいいだろう。いや、まだ少しだけ残つてゐる。

「顔を出したらどうです、賢者様」

俺は何も無い空間を見つめ言葉を放つた。その言葉に反応してか、空間が裂け1人の金髪の女性が現れた。

「あらよく気が付いたわね、紀伊田　くえん」

彼女は妖怪賢者　八雲　紫。こつして顔を合わせるのは初めてだが一発でわかる。たしかに藍や慧音が言つており食えないやつだと。

「あの色の無い世界に干渉し続ける力がありましたから。それにあなたなら見ていると思つてました」

この異変の中、彼女だけ動いていなかつた。おそらく試していたのだろう、本当にどうにもならないようなるまで試すつもりだつたのだろう。ここの人間が、妖怪がこの危機を解決できるかどうかを、そして今後も起きるかもしれない異変に対抗できるかを。

「ふふふ、流石ね。お酒選びと商売しかできないと思つていたけど、なかなかやるわね。後のことは任せなさい。」

「ひとつお願いしていいですか

「言つてみなさい。今回の異変解決の立役者なのだから、お願いくらい叶えてあげるわ」

最後の仕事だ。

「紅魔館の住人を幻想郷に受け入れて欲しい

俺は彼女のが憎めなかつた。俺と似た者なら彼女には幸せになつて欲しかつたのだ。

「もちろんそのつもりよ、幻想郷は全てを受け入れる。それなりのペナルティーは負つてもらうけどもね」

それを聞いて安心した。あとのことは任せればいいだらう。俺は人里に帰つて、慧音に無茶をした説教を受ける。それを見て妹紅が笑うだらう。その後傷の手当だ。ナイフのお陰で命にも行動にも影響

が無いようにしているが、左腕が無くなつて、体中の骨が折れてい
るだから早く手当てをしないと。そして最後はチルノを褒めてや
らないと、よくがんばつたと。

「くえん、貴方はこれで英雄ね。ただの人間がたつた1人で吸血鬼
を倒したなんて」

俺はため息をついた。この妖怪はなにを言つているのだろう。

「解決したのは鬼ですよ。幻想郷最強の妖怪、鬼が解決したんです
よ。俺は雑貨屋『宇宙檸檬』店主 紀伊呂 くえんっていう最弱で
す」

「コーヒー片手に

「コーヒーはいいね。幻想郷ではなかなか飲めないんだよな

レミリア・スカーレットが引き起こした異変、吸血鬼異変から1週間がたつた。俺の予想通り慧音に説教をくらった、妹紅には笑われた。俺が怪我と能力の酷使で倒れることで中途半端なところで終わってしまったが。怪我は妹紅が何処からか持ってきた薬のお陰で数日で回復に至った。流石に無くなつた左腕はそのままだが。だが妹紅には感謝しないといけないだろう、おそらく彼女は仇に頭を下げて薬を貰つてきたのだ。酒を奢つても罰は当たらないと思つ。

異変の首謀者のレミリアは博麗の巫女による契約によつて縛られることになつた。人里で人を襲つてはいけない、食料の人間は支給されるという軽いものになつたのはあの賢者が動いた結果だろう。

そして異変の解決者は幻想郷最強の妖怪ということになつてゐる。俺が怪我したのは異変中に戦闘に巻き込まれたことになつてゐる。誰も想像しないだろう、簡単なお札も使えない、最弱を自称する俺が動いたなんて。事の真相を知つているのは一部の人間と妖怪だけだ。

「さとりには助けられたよ。お陰でナイフの秘密に気が付けたし

今、俺は地霊殿に訪れ、さとりとお茶をしている。

「にしても、さとりには助けられてばかりだな。幻想郷に流れ着いた時も怪我の手当てをしてもらつたし」

「いいのよ、別に。嫌われ者の妖怪達や鬼も恐れずに接してくれてる人間は貴重だもの。それに幻想郷に流れ着いた時もただの気まぐれで助けたのなのだから」

俺はライダースーツの女に襲われ氣を失い、次に目覚めた時地靈殿の一室に眠っていた。俺は旧だが本当に地獄に落ちたのだ。だが運が本当によかつた。さとりのお陰で怪我もだが心も助けられた。初めの頃は情緒不安定だったが、怪我が治る頃には普通の精神状態に戻る事が出来たのだ。全てはさとりの能力のお陰だ。

「そういえば、どんな気まぐれで俺を助けたんだ？」

「ペットにしようと思ったのよ。外の人間なんて珍しいじゃない？」

さとりのペット、見た目幼い少女のペット。それはなんとも危ない響きで、感じてはいけない興奮を覚えてしまつ。それはそれで楽しいかもしれないなど考えていたら、テーブル越しに思いつきり足を踏まれ、すこく睨まれてしまつた。心が読まるのも考え方だ。言葉の意図をちゃんと汲んでくれるからから会話が楽だが、おちおち妄想もできやしない。

「はあ、あなた自分はロリコンではないとかいつてるけど、説得力無いわね」

「ひどいな。つかさとり、お前のほうが10倍以上年上だからロリコンではないだろ」

「自分で言つのもなんですけど、私に好意を持つ人はロリコンよ。思えばペットに対して興奮を覚えるなんてMね。ロリコンの上にMなんて救いようがないわね、くえん」

たしかに救いようがない人間だ。ロリコンでMなど外の世界では犯罪者予備軍と言われるレベルだ。しかし俺はロリコンでもMでもない。たしかに外では犯罪者だが。これは全てさとりが悪いのだ、さとりが俺をペットにするなど言つのがいけないのだ、など考えていたらまた足を踏まれてしまった。本当に考え方だ、心が読まるのも。

「そう言えば、勇儀さんにくえんが吸血鬼を倒した話をしたら、あなたと手合わせしたがっていたわよ？」

「勘弁です。流石に死んでしまいます」

あの人と手合わせなどしたら死んでしまう。ましてや『怪力乱神を持つ程度の能力』などという意味の分からない能力を持つ上に、喧嘩のときは酒を溢さずに戦うという化物だ。左腕の次は右腕が犠牲になってしまふだろう。

「そういうれば大丈夫なの、左腕がなくても」

おそらく俺の心を読んで聞いてきたのだらう。

「まあ不便といえば不便だけどね。仕事もできるし大丈夫かな」

「勇儀さんに頼んだら義手が作れる河童を紹介してもらえたと思つけど?」

「いいよ、そんなことしたら山が大変になる。それにこれは、ね。心読めるなら分かるだろ?」

「枷、ね。妹を殺した、多くの人殺した自分を忘れない枷ね」

「これは枷だ。俺が罪を償い続けるための枷なのだ。だから義手だろうと左手はいらない。」

「なあ、なんでれもんはあの時狂つたんだろうな」

「本当になんとなく聞いてみた。もしかしたら彼女なら、このナイフについて知っていた彼女なら何か知っているだろうと。」

「そのナイフのせいでしょうね。まだ私が外にいた時に見たことがあるのよ、それを。『色に染まらない程度の能力』その本質は何事にも影響しない事にあるわ。それを使えば本来の自分の色を取り戻すこともできる。つまりね、その人の本質である能力を手に入れることが出来るの。多分れもんちゃんは強すぎる能力のせいで狂気に触れてしまった」

つまり、あの日俺に関わった人の中には能力に目覚めてしまった者がいてもおかしくはない。そしてそいつが幻想郷に流れ着いてもなんらおかしくはないのだ。俺は罪を償う。だが俺が傷つけた人を前に何をするのだろうか。仮にそれがれもんのように狂気に触れていたら、俺はどうするのだろうか。

コーヒー片手に（後書き）

さとりは俺の嫁！！！！

ア命あるヤーは俺を信じてからにして

とくも汰我です

廿二史劄記

吸血鬼異変無事完結です。いやはや……、どうにかなりました。ほ
ぼ見切り発進で始めたこの話、何とか続きそうな予感です。

つこでなので紀伊呂くえんの誕生秘話（？）をじこで語るうかと。

彼は数年前に書いていたオリジナル小説の主人公でした。書いてた
といつてもプロットが存在してただけに等しい小説でしたが……。
今回その彼を二次をオリジンという形で復活させてみました。もとも
との名前は『セレン』でした。あの原子のセレンです。その色から
とつて『灰色の死神』、原子のセレンの由来の『セレーヌ』から『
灰色の月』。そんなイメージのキャラでした。

くえんが起した通り魔事件、彼の前に現れた女等々、もともと有つたものを流用しています。お陰で彼の背景はイメージ強いやすかつたです。困った点といえば、名前です。もともと『セレン』って名前は有りましたが、ストーリーで出会った女の子に名づけられたものだったので、彼本名と呼べるものがないのです。なので今回新たにつけたのが『紀伊呂 くえん』です。紀伊呂はまんま黄色、くえんは檸檬の古い呼び名で、黄色い檸檬からきています。ちなみに檸檬は好きなイラストレータのサイトの名前からとつたプラス檸檬のレモンの花言葉の『愛』『情熱』。英語圏でのイメージ『無価値

『不完全』からです。

おやりくですがこの話は、今後も昔のプロットを参考に書かれています。なのでオリジナル要素濃い話ですが、それでもいい方は今後ともお付き合いお願いします。

日常を壊す淑女

日常、いつものように店の椅子に座りタバコを吸う。変わらない日常の中にも化はあった。世話になつている霧雨の店の娘さんが魔法使いになると黙つて飛び出したり、博麗の巫女が本格的に巫女としての仕事を始めた。あとは多くの妖精が紅魔館にメイドとして雇われたり、ナルノがよく人里に入りするようになつた。少しづつだが幻想郷は変化している。そんな中、俺は変化を無くしてしまったのも変化のひとつなのかもしれない。俺は年をとらなくなってしまったのだ。原因は分かっている、ナイフのせいだろう。ナイフの所有者である俺は色をなくしてしまった。人間としての当たり前の変化という色が無くなつたのだ。このままでは人間として当たり前のように生き死ぬことが出来ないだろう。だがそれはそれでいいのだと諦めている。これもひとつの罪だと納得している。

「うして幻想郷は変化し続けているのだ、変化といえばもうひとつある。常連の客が増えたのだ。

「よお、咲夜ちゃん。頼まれてた酒入荷したよ」

彼女が来たことに気が付き、俺は入荷したばかりのブランデー片手に立ち上がつた。銀髪でメイド服など着ている少女、十六夜 咲夜だ。彼女はコスプレでメイド服を着ている訳ではない。れっきとしたなメイドなのだ。しかもただのメイドではない、あの鬼の住まう紅魔館のメイドである。

「本当に入荷したのね。無理だと思つてたわ」

「まあ俺にはコネがあるからね。どうだい、ここでの生活は慣れた

かい

彼女は外の世界から人間だ。俺としては親近感が湧く存在でもある。と言つても彼女は才能が有る側の人間であり、俺のような最弱と比べるのは失礼だろう。

『時を操る程度の能力』それが彼女の持つ能力だ。時間を止めるのも、コマ送り、早送りをお手の物である。俗にいうチート能力だ。時間を止めるなら、あの青い狸型ロボットの秘密道具でもあるポピュラーの能力だが、大長編映画でいくらピンチになつても使うことの道具の一つだ。個人的には『もしもし何とか』と並ぶチート道具だと考へている。これさえあれば大抵の問題は解決できるのだから。時間を止める、世界を思い通りに書き換えることが出来たら、ストーリーが破綻するから出番がないのは仕方ないのかもしれないが。『何とかボックス』に関しては、別の世界を作るので微妙に世界を作り変えるのとは違うのだけれども。

「それなりには、お嬢様が暇をして無理難題を言つのには困つてゐけれどもね」「

「ははは、あの吸血娘は歳相応に大人しくすればいいのに、500年は生きてるんだろ」「

「しかたないわよ、妖怪にとつては暇が一番の敵なのだから」

色を無くし、変化をなくした俺はどうなのだろうか。永遠と終わることのない罪滅ぼしは繰り返す俺の敵は何なのだろう。暇はしない、死さえ罪滅ぼしと考えれば死さえ敵ではない。そんな俺の最大の敵はいつたい。

「くえんさん、私はまだ買出しがあるのでこれで。そつそつ、お嬢様が会いたがっていたわよ」

「はいはい、気が向いたら行くつて伝えといて」

あくまでも社交辞令としての返答。出来れば会いたくないってのが俺の本音だ。これは吸血娘の自業自得だ。前に会った時に俺の血を吸おうとしてきたので、紅魔館中を逃げ回り、俺は紅魔館の地下に迷い込んでしまった。そのせいで悪魔の妹におもちゃにされかけてしまうという、なんとも稀有な経験をした。生きていられたのは奇跡に近い。もしパチュリーに見つかるのが遅かつたら死んでいただろ。俺を助けるために彼女の使い魔が変わりに犠牲になり全治1カ月の怪我をおつてしまつたが。始まりは吸血娘がB型の血が吸いたいなどふざけた理由だ。もう会いたくないと思つても仕方ないだろ。

「ふふ、ロリコンの貴方が幼女に会いたくないなんて嘘ばっかり」

突然背後か話しかけられた。相手はわかっている。この胡散臭い感じの知り合いなどそうそういない。いや彼女以外にいてもらつては困る。

「人の心を勝手に読まないでください。そういうのはあなた以外に担当者がいますから」

「貴方がお熱な地下の子ね」

「そーですよ。で、賢者様が俺に何かようですか？ 暫してるんですか？」

妖怪賢者、ハ雲 紫だ。実際に会うまでは店の件でお世話になつてゐる人だから、会つてお礼を、失礼が無いようになど考へていたが、会つて俺の考へは変わつた。この妖怪相手に下手に出るべきではない。虚勢でも強気な態度で接しなければ、面倒事に巻き込まれると俺の最弱の感が言つている。

「そうね、暇はしているわ。どう私の暇つぶしの為に橙に手を出しながら。貴方好みの口づけ子よ。どうかしら？」

「で、手を出した俺が藍さんにボコボコにされるのを酒の肴にするわけですね。残念ながら俺はロリコンではないんで手は出さないです。よつてあなた願いは叶わないです」

そう、と弦巻紫は本当に残念そうな顔をしている。この妖怪が本当に幻想郷の起源に関わっているのだろうか、ただ人が苦しむのが見たいだけの捻くれ者だ。

「つか、本当になんの用なんですか、まさか俺をからかう為だけに来た訳ないですよね、賢者様ともあらう方が」

「もちろん大事な用事があるわ。と、言つわけで『名様』」案内

突然の浮遊感、そして俺は重力に引っ張られて落ちて行つた。

どうも俺の感は外れたらしい。ハ雲 紫は強気に出ようとい、強制的に面倒事に巻き込むらしい。

「つか……、店ぐらい閉めさせり……。泥棒入ったら責任とつて貰うからな……」

俺の叫びは虚しく虚空に呑まれ消えていった。

只今絶賛迷子中。いや迷子ではない。二十代後半の男を子と呼ぶのは間違っている。子が適応されるのは十代までだ。只今絶賛遭難中、言い換えた途端に深刻な問題になってしまった。悲しいかな、大人になつての失敗はいつだって深刻な問題なのだ。これもそれも紫のせいだ。こうしてあても無く魔女が住むと言われている『魔法の森』でさ迷つてしているのは、事の始まりは先日、紫のスキマに落とされ幻想郷のどこにあるという八雲邸を訪れた事が始まりだ。いや、それは責任転嫁でしかない。全ては昔やつてしまつた失敗が始まりだつた。

「よつじんわ、八雲邸へ」

俺は上下逆さまの状態で見覚えのない畳を眺めながら紫の声を聞いた。

「これは『一丁寧』に、どうせなら案内も『一丁寧』にしていただきたかった

俺は紫によつて無理やりここへ連れてこられた。『境界を操る程度の能力』によつて。境界、境目、物事の区分、そんな所だろうか。それを操るということは恐ろしい事だ。空間、距離の境目を操れば今のように移動できる。一般的に言われる結界も空間の隔離だ。つまり結界も操れるだらう。考えれば考えるほど何でも操れる能力に思えてしまう。咲夜の能力と同じチート能力だ。

「で、仕事中のただの人間を攫つてどうするつもりですか」

俺は身体を起こし胡坐を組み、紫を見詰める。

「ただのお願いよ。いえ、貴方の後押しかしら」

「お願い、後押し？　ただの人間相手に賢者様ですか」

目の前に居るのはチート能力を持つた妖怪だ。それが里で雑貨屋で店主をやっている人間相手にお願いする事なんてまず無いない。ましてや後押しなどするわけが無い、俺に恩を売つても特など無いのだから。

「ただの人間ね、吸血鬼を倒した鬼が人間ね」

鬼、確かに俺は鬼だ。殺人鬼という墮ちてしまつた人間だ。

「なに簡単な事よ。これから異変を解決をしてもらつだけ」

「異変解決は巫女の仕事です。それに今は霧雨の娘さんも異変解決やつてるじゃないですか。俺には大役過ぎます」

俺が吸血鬼異変を解決したのは代役に過ぎない。今は異変解決の役者が揃つてゐるのだ、俺が行く必要は無い。仮に彼女たちでは手が余る程の猛者が相手なら妖怪が解決すればいいだけだ。

「なら彼女達に任せようかしら、人殺しを」

紫が言つた言葉は異変解決に無関係の単語だった。異変は妖怪がその力を誇示するために行われるのが一般的だ。稀に自然現象として起きる場合があるが、それさえ例外と言える範囲だろう。

「あの子達には荷が重いかもね、人殺しなんて。でもこれも幻想郷

の為だわ。その手を血に染めてもらいましょう」

意味が分からぬ、しかし子供が人殺しなどしたらいけない事は分かつてゐる。

「いつたいどういうことです。なんで異変解決に人殺しが関係あるんですか」

「簡単よ。今回の異変の首謀者が人間つてだけ」

「それこそ分かりません。人間には異変を起こす理由も、力もある訳ない」

確かに人間の中にも恐ろしい能力をもつた者がいる。しかし所詮は人間だ。そんな事をすれば待つのは能力酷使による死か、妖怪の餌食になるだけだ。

「くえん、それでも異変は起きてるのよ」

「仮にそうだとしても、妖怪や神が解決すればいいじゃないですか」

「妖怪は人間を裁かないわ。神も似たようなもの」

確かにそうだろう、妖怪は人間を裁くことなんてしない。神だって見守り、導くものだろう、いや神に関しては紫が借りを作りたくなりだけだろうが。

「それにこの異変は貴方のせいでもあるの。貴方が人間を殺した道具がどういう物か知っているかしら」

いつも身に付けているナイフに触れる。これには能力が宿っている『色に染まらない程度の能力』色に染まらないということは何事にも影響されない事だ。俺は危惧していた、仮にあの日殺し損ねた人がいたらナイフの影響を受けているのではないかと。今まで色々な経験によって染まった色が落ち本来の色を取り戻すではないかと。その結果能力が生まれるのではないかと危惧していた。そしてそいつが幻想郷にいつか現れるのではないかと。

「それでも貴方は彼女達に異変解決を任せらるかしら」

妖艶な笑み、それはまさに妖怪そのものであった。俺が断れないことを知った上での要求だ。俺は首を縦に動かすという選択しかなかった。

「わかりました、引き受けます」

「ふふふ、よく引き受けてくれたわ。それじゃ早速お願ひね

俺はまた浮遊感と共にスキマに落ちて行つた。

- 幕間 -

僕は昔大切な人を守ることが出来なかつた。そいつは僕の友達で半身、そして初恋の相手だったかもしれない。それが実際のところ初恋なのかどうかはわからない。あの日から彼女は目を覚ますこともなく病院のベットの上で眠つている。6年前の10歳の姿のまま。医者にも理由は分からぬらしい。姿が変わらない彼女と違い僕は今年の春から高校に通い始めていた。16になつた僕と、10歳のままの彼女には大きな隔たりがある。その隔たりが僕の気持ちをよく分からないものへと変えてしまつた。それでもほぼ毎日病院に

通う僕が彼女に囚われていることには違いないだろう。それが恋なのか、守れなかつた償いなのかはわからない。

「あら、くろ君また来たの」

毎日のよつこ病院に通つてゐる僕は看護師にすっかり覚えれ、こうしてあだ名で呼ばれる仲になつた。

「はい、もう習慣ですから」

看護師に挨拶をしながら彼女の病室に向かう。こうして彼女の病室に向かうのは僕以外では医者か看護師程度のものだ。両親さえ彼女の見舞いにはもう来ない。彼女の生体維持に掛かる多額の費用のせいで厄介者扱いなのだ。世間対の為だけに生かされている。それが今のが今の彼女だ。

「よ、來たぜ」

返事が返つて来ないのは知つてゐるのに、こつちもって僕は彼女に話しかける。望んでいるのだいつか返事が返つてくることを。

俺は魔法の森を充ても無く迷っている。紫はどこでどんな異変が起きているのかさえ教えてくれはしなかつた。ただあの日、異変解決を引き受けた日、俺はここに落とされた。紫のことだ、ここに何かがあるから落としたのだろう。ヒントとも言えないヒントに頼りして3日続けて森に分け入つて。そのせいで毎日店は休業中だ。商売上がつたりとしかいえない。

まだ5月初めの森の奥は日光も届かず冷たい空気が流れていた。どこか寂しい空氣だ。こんな陰気な所に住むという魔女はよっぽどの変わり者だろう。そういうえば霧雨の娘さんもここに住んでいるらしい。確かにこの瘴気に溢れた森は魔法の修行に適している。だが大抵に人間、妖怪では瘴気に当てられてしまう。ナイフの能力で『色』を無くしていなければ、大人の俺だって倒れてしまつているだろう。ただの里の娘だった子がこんな所に住んで大丈夫なのだろうか、ついでに彼女に会つてみる事にした。

そんな訳で森の奥に進みすぎた俺は絶賛遭難中だ。完璧に方向感覚を無くしつたい何処を歩いているのかさえ分からない。真っ直ぐ進んでいるつもりなのだが、どうもグルグル回つてしまつているらしい。道に迷うのは妖精の悪戯、よくそんな事を言われるが『色』を無くしている俺には関係ない。つまり俺が純粹に方向音痴なだけだ。思えば、幻想郷に来たばかり頃、地下の旧都で散々迷った挙句に勇儀に発見され酒に付き合わされた記憶がある。あの時は道に迷つた事よりも飲まれ過ぎた記憶しかない。なんでウイスキーをボトルごといつたのだろうか。たしかさとりとの事を聞かれて、誤魔化すために。

「おひ 檸檬じゃないか」

そんな昔の話を思い出している時に、突然背後から話しかけられた。俺の事を店の名前で呼ぶのは霧雨の関係者しかいない。そしてこの森で俺の事知っているのは。

「霧雨の嬢ちゃん、お久しぶり。にしてもよく俺を覚えてたな

案の定、霧雨 魔理沙だった。探すつもりで森の奥に向かったが、まさか本当に出会うとは思っていなかつた。それより驚いたのは俺の顔を覚えていたことだ。店を出す時に彼女の父親にお世話になつた。その時に軽く顔を合わせた程度だった俺を覚えていたのは驚きだ。

「外からきた奴なんて珍しかったからな。なんだお前全く老けてないな、妖怪にでもなつたのか？」

色を無くし変化を無くした俺と違い彼女は俺の記憶よりも成長していた。小さく生意気そうな短髪だったが、今は身長も伸び髪も伸ばしていた。身長に関してはそれでも歳にしては小さいが。

「いや、まさか。ただ若作りをしてるだけだよ」

少し嘘を付く。

「そーか。で、こんな所にびづして来たんだ」

異変の解決の為、そう素直に答えないほうがいいだろう。彼女は巫女の真似事で異変解決をしているのだ。そんなことを言えば絶対に解決しようとするだろつ。紫には何も聞いていない。一体どんな奴

がどんな異変を起しているのかは。それでも彼女は人殺しになると
言っていた。そんな事に彼女を巻き込むわけにはいかない。

「霧雨の親父さんに娘ちゃんの様子でも教えてやるかなって」

「もつ私と霧雨の家は関係ないぜ。それに親父の方から勘当したん
だから、親父も私なんかに興味ないだろ」

彼女は勘当されている。詳しくは知らないが、父親は娘が魔法使い
になるのは反対だったらしい。そして彼女は家を飛び出した。それ
でも魔理沙は霧雨の姓を名乗り、父親を名前ではなく親父と呼んで
いるあたり、まだ父親が好きなんだろう。そして認められたい想い
も有るのだろう。

「そりゃ、親父さんに恩でも売つておきたかったんだけどな」

そこを突っ込むのは野暮だらう。

「檸檬、ついでだから家にでも寄つていくか？ 最近は森の様子も
おかしいし」

様子がおかしい、おそらく異変の事だろう。ここは少しでも情報が
欲しいところだ。

「どうしたんだ？」

「茸とかをとつている時とかに、掘んだと思ったらそれが消えるん
だよ。今日だって籠いっぱいの茸が消えてしまつたんだぜ」

物が消える異変、そう考えるべきだろうか。

「多分茸の胞子が増えたのが原因だと考へてるけど、晩飯のおかずが消えるのは勘弁だぜ。」

この森には茸の胞子が溢れている。それが瘴氣であり、入った人間に幻覚を見せ、体調を崩す原因だ。仮に物が消える異変ならば、気づく者は少ないだろ。ここで物が消えてしまつても幻覚を摑まされてしまつたと勘違いをするのが普通だ。だから異変が起きているのに巫女も魔理沙も動いていないのだろ。気づくことの無い異変、妖怪はそんな事はない。妖怪が異変を起すのは存在の証明だ。これは人間が起した異変で間違いない、つまり紫は嘘を付いていない。

「そうか、なら早く里の帰つたほうがいいな。俺はこここの瘴気に慣れている訳でもないし。悪いけど森の外まで案内してくれないか？」

「いいぜ。今晚は香霖の所で晩飯食べるつもりだつたしな。晩飯には早いがついでに案内するぜ」

- 幕間 -

最近よく白昼夢を見る。白昼夢は、目覚めている状態で見る現実味を帯びた非現実的な体験や、現実から離れて何かを考えている状態を表す言葉。ようは幻想だ。僕は幻想に悩まされている。今だつて、彼女が僕の周りを漂つて笑つている。これは夢なんだ、だが夢でも彼女と一緒にいられるのが嬉しかつた。現実の彼女はもう笑つてくれないのでだから。そして彼女を無くした悲しかつた記憶ではなく、楽しかつた記憶を思い出すことができる。だが一緒にあの日のこと思い出してしまう。あまりにも彼女の笑顔があの日のものと重なつてしまつて。

6年前僕らの街に死神が現れた。梅雨前のまだ冷たい雨の中僕らは一緒に帰っていた。たしか駅前の商店街から帰っている途中だった。今でもはっきり覚えている。向かいから手を真っ赤に染めた黒いコートを着た男が現れた。僕の頭はそれが何なのか処理出来ずに立ちすくんでしまった。それが間違いだつた。すぐ彼女の手を引き逃げればよかつたのだ。そして立ちすくんでいる僕の横で彼女が切りつけられた。僕は倒れていく彼女を受け止めることしかできなかつた。それを見た大人たちが男を取り押さえようと向かつたが、彼らはあつけなく切り殺されてしまった。彼女の血と彼らの血を浴びながら僕は彼女を抱きかかることが出来なかつた。そして彼女はそれから目を覚ますことは無かつた。

その後も男は止まることもなく、死者21名、重傷者1名という日本犯罪史上に残る事件となつた。メディアはこぞつてこの事件を『死神通り魔事件』として特集した。獵奇犯、宗教、社会への反抗、いろいろな憶測を飛ばして騒ぎ立てた。しかしそれは憶測のまま解決しなかつた。男『紀伊呂 くえん』は逃亡したまま6年の月日がたつた。あれだけ騒ぎ、面白がった事件も今では忘れ去られ話にもあがらない。僕は怖かつた、こうやって事件が、死んでいった人たちが、彼女が幻想になつてそまうのが怖かつた。もしかしたら僕が白昼夢に取り付かれたのはそのせいかもしない。夢のよう消えて欲しくないから、彼女の夢をずっと見てるのかもしれない。

俺は魔理沙と分かれた後、里には帰らずに地靈殿に向かった。地底へと繋がる穴の近くには誰も近づくことはない。人間はもちろん、妖怪でさえ。人間は恐ろしい妖怪が出ると恐れて、妖怪はかつてに支配者の鬼を恐れて。それ以前に紫によつて妖怪は地底に向かうことは禁じられている。こうやつて地底に下りる者は俺ぐらいものだ。本当は地底で暮らしたかった、しかし地靈殿の主であるさとり、地底のまとめ役の勇儀はそれをよしとしなかつた。俺には地底は居心地が良すぎるのだ。妖怪しかいなく、元地獄という土地は罪に汚れた俺の心を癒してくれる。人間という立場を忘れてしまうほどに。だから俺は地底ではなく人里に暮らすことが進められた。本当に鬼に墮ちきらないために。

「あら、また来たの？」

地底と地上を繋ぐ橋にいつものように水橋 パルスイがいた。橋姫と呼ばれる妖怪だ。はるか昔に夫に裏切られて憎悪と殺意に駆られるあまり川に身を浸し、生きながらにして鬼に墮ちた人間らしい。本人から聞いたわけではなく、あくまでも噂話なのだが、俺にどうては親近感がわく相手だ。

「ちょっとね。さとりにでも晩飯たかろうつて思つて

「ぬましいわね。そんな相手がいるなんて。別に通つてもかまわなければ、騒ぎは起さないでよ。またあんなのに巻き込まれるのは御免だから」

「はいはい、了解です」

ひらひらと手を振り別れをつけた。どうも前のことを見失っているらしい。吸血鬼異変を解決して傷も癒えた俺は例のごとく勇儀と飲んでいた。俺は毎回、勇儀と飲むと悪酔いをする。いや、勇儀が悪いのだ、人間の限界近くまで飲ませ続けるのが原因だ。その日は地靈殿で勇儀を含め、さとり、彼女のペットのペット達や他の地獄の妖怪と飲んでいた。確かにさとりのペットのお空と喧嘩したはずだ。

理由は酔つていて覚えていないがさとりに関係した事だつたと思う。勇儀のちやちやでいつそう喧嘩は白熱し、ついに周りにも被害がでた。その相手がパルスイだ。結局パルスイによつて喧嘩両成敗された。記憶が鮮明に覚えているのはお空と共に正座でさとりに説教されているのと、それを見て爆笑する勇儀だ。こうやって思い出すと、確かにパルスイには悪いことをしたとは思う。だが結局は勇儀があつたのが原因なきがする。

なんて思い出していたら、地靈殿にたどり着いていた。門をノックもせずに俺は中に入つていく。いつも來ても思うが、地靈殿は広い。玄関ホールだけで俺の家の数倍はある。紅魔館も負けない広さがある。そして悪趣味さでも負けていない。紅魔館は目が痛くなる程真っ赤、地靈殿は西洋風の外観で、黒と赤のタイルで出来た床、ステンドグラスの天窓と本当に趣味はいい。しかし主であるさとりの妹、こいしが飾つている死体で台無しだ。こいしは気に入つた死体を飾る趣味がある。子供が蟻を殺すのと似たようなものだろうが、ダインミックすぎる。それに「くえんお兄ちゃんの死体も飾りたいから早く死んでね」とか彼女から言わわれている身からしたら、こんな趣味なくして欲しい。さとりもペットや俺には厳しいが妹には緩い。そのせいでこの悪趣味だ野放しになつてゐる。機会があればこれをどうにかしたい。本当に。

「さとり、来たぞー。勝手に上がるぞ」

返事も待たずにつかずかと奥に進んでいく。そしていつもさとりがいる玄間に向かった。しかしそこにはさとうちは居なかつた。

「入れ違いか……。じゃあ勝手に始めさせてもらいますか」

部屋を漁つて、酒を探し始める。いつもなら探せば飲める物が出てくるが、今日は出でてくるのは苦手なお酒ばかり。無理に飲んでも悪酔いするだけだ。ここは諦めてさとりが帰つて来るのを待つか、そこをやしている子を捕まえて酒のありかを聞くべきだ。ひりだり。

「なあ、ここしちゃん他の酒つて無いの？」

後ろを向き何も無いはずの空間を見詰める。少分だがここにいる、さとりの妹のこいしが。見えないし気配も無いが、つまりは彼女は色を無くしてこる。だからこそ俺にはここにいるのがわかる。

「やつぱつお兄ちやんこはれちやうか

すっと色が付き、一人の緑色の髪の少女が現れた。古明地ここしだ。姉であるさとりよりも発育がよく彼女よりの年上に見えるが中身は無邪気な子供だ。無邪気すぎて死体を飾つてしまつほどだ。

「忍者こいし、お前の能力では俺を欺けない」

彼女の能力は『無意識操る程度の能力』俺自身能力などに詳しくないが、無意識操り他人から認識されないよう出来るらしい。青い狸型ロボットの道具でいうならば、『石こりなんとか』とこつたところだらう。

「つまんないの。お兄ちゃんが好きなお酒ならないわよ。お姉ちゃんが切らしたとか言ってたし」

なんともタイミングが悪い。せっかく足を運んだのにせとつもいな
ければ酒もない。

「で、どうしたの？ 突然来るのはいつものことだけビ

「ん、ああ別に理由はないけどね。ただ大きい仕事の前にさとつと
飲もうと思つてね」

「ふーん。じゃあしばらく待つてたら帰つてくると黙つよ。お酒と
か食べ物とか買いに行つてるだけだし」

じゃあ、と手を振り消えてしまった。おそらくいつものように無意
識の赴くままに幻想郷をふらふら散歩でもしに行つたのだろう。俺
は1人になった。ペット達と遊んでもいいが、おそらくこの時間だ
とまだ灼熱地獄や怨靈の管理を忙しくしているのだろう。

俺は適当な椅子に腰掛け、そしてタバコに火を灯す。明日から本格
的に異変の調査を始める。おそらく近いうちに異変の首謀者と遭遇
して戦いになるだろう。ただの人間が吸血鬼より強いことはないだ
ろう。また怪我をするだろうが、死ぬことはまず有り得ない。だが
俺は首謀者を殺すことが出来るのか。紫はやたらと人殺しという言
葉を強調していた。つまりは殺さないといけない対象なのだろう。
俺はまた罪を重ねることが出来るのか、俺にはわからない。もしか
したら迷いを持つてしまい逆に殺されてしまう可能性だつてある。
俺にはわからない。だからさとりに聞いたかったのだ。俺は本当に
なにを望んでいるのかを。

俺はタバコの煙を吐き出す。

- 幕間 -

僕はついに気が狂ったのかもしない。最近白昼夢のせいか眠れなくなってしまった。夢は起きていた時の記憶を整理するためにあるらしい。白昼夢を見続ける僕には眠りが必要でなくなってしまったのかもしれない。しかし眠れないということは僕の精神を崩壊させるには十分だつた。もう何が白昼夢で何が現実かが分からなくなってしまっている。だから突然こんな見慣れない森に迷い込んだ時俺は安心した。ついに僕は眠ることができ、夢を見ることが出来たのだと。

肌寒い森、そこには見慣れない草が生えている。そのくせ動物がいるような気配は全くなない。ただ森があるだけで何も無い。ここ以外に出たら何かあるのかもしない。しかし出てしまつたら夢から覚めてしまつ気がして僕は森の奥に止まり続ける。夢から覚めたらまた辛い現実と向き合わないといけないのでから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4580t/>

宇宙檸檬

2011年10月7日00時47分発行